

超次元短編集

響雪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超次元ゲームネプテューヌのキャラとオリ主の短編を書いていきます。

リクエスト等受け付けてます！

○○のヤンデレが見たい！○○のデレデレが見たい！その他なんでも受け付けてます！
！クオリティは別としてですけど。

注）オリ主は一貫したもので、一度キャラ設定を見てからおすすめます。

リクエストですが、活動報告の方へ書いていただけると幸いです。

すみません。ただいまかなりの不定期ぶりとなっています。

目次

はじめに	
オリ主設定	1
ブラン（ホワイトハート）	
ずっと前から…	5
愛しいから	17
旅を終えて―遠くに行かないで	
29	
ピーシエ（イエローハート）	
小さいおよめさん	49
プルルート（アイリスハート）	
ぬいぐるみは…	61
ネプギア（パープルシスター）	
旅を終えて	72
ハーレム	
逃げられない	83
暗黒星くろめ	
くろめ救出	96
くろめ救出・その後	112
天王星うずめ	
旅の共	124
日常	
イタズラな日	139
ネプテューヌ（パープルハート）	
大人の魅力	154

始めに

オリ主設定

キャラ設定

- ・オリ主〔名前未定〕

（短編集なら名前なしかな？と）

- ・在住 ルウイーの教会

- ・職業 冒険家（最高ランク）／ブランの護衛

- ・外見 17，8歳

服装

未定

（すいません、作者は服に関してはそこらの小学生に負けるかもというくらい無頓着で知識がありません。勉強し、必ず設定するので、それまでのご想像にお任せします。それか知識のある方、アイデアを出して貰えると幸いです。これは主人公の像にあっている！といものがあれば、それを採用させていただきたいです。 ）

- ・武器 刀

（先代のルウイーの女神から貰った刀。刀身にルウイーのシエアが籠っている。特徴として刀身にシエア増幅装置がある。それにより、自身のシエアを爆発的に高め、擬似的

な女神化を可能にする。）

・戦闘スタイル

刀による居合い4／魔法3／その他3

・作者が考えた主な技

（原作と違い、技名に意味などありません。それと、今後も増えてくかもです。）

・テラレイド

シエアを載せた刀の居合い。抜刀時横に一閃。そこから返す刀で降り下ろし、十字の斬撃を飛ばす。

・一刀必中

居合い。精神統一することで、必ず当たる一撃。しかし、相手にとっては隙ができ、攻撃の的になってしまう。

・パテロリロンツエ

ブランから習った技。抜刀した状態で相手を斬り、勢いを着けていき、トドメに刃を鞘に戻し、斬った勢いそのまま相手に叩きつける。

・擬似女神化

刀のシエア増幅装置に自身のシエアを送ることでシエアを爆発的に高め、擬似的な女神化をし、女神と同等の力を得る。ただし、自身のシエアが女神化を保つのに足りなく

なると解け、最悪の場合数日寝込む。

- ・主人公の特徴（今後も増えてくかもです。）

- ・ルウィー大好き、よってその守護女神であるブラン、ロム、ラムも大好き。ただし、恋愛的なものではない。

- ・女神から貰った特殊な刀の影響で、女神同様つまり永遠ともいえる命を持っている

- ・女神同等の力、女神化しないネプテューヌ達なら普通に勝てる。女神化した後も、擬似女神化をすれば、ほぼ横に並ぶ。しかし、長期戦となってくると、シエアのこともあり、徐々に差が出てくる。女神候補生に負けることはまずない。

- ・その事もあり、女神同士の集まりにはよく顔を出している。というか出させられる。原因というか、理由はブランからの絶対の信頼によるもの。

- ・主人公の経歴？ 生い立ち？ 的なもの

（これは今後、ストーリーリーものを書くときに詳しく書いていくので、ここでは省略します。）

- ・疑似女神化の詳細

刀のシエア増幅装置へ自身のシエアを送ることで、シエアを爆発的に高め、女神同等の力を得る。

ただし、自身のシエアが疑似女神化を保つのに足りなくなつた場合、疑似女神化が解ける。酷使してしまうと、最悪数日寝込むか、もしくはそれ以上の：：。

疑似、というだけあり、通常の女神化とは大きく違う。まず、プロセスサは装備されない。ただ、服装の変化はある。

その代わりに身体能力、反射神経等の強化がされる。女神よりは防御力は落ちるが、それでも危険種の攻撃に耐えることも可能なほど。

移動方法だが、足元に一人分のシエアによる足場を作る。そこを基本に足場を作っていく、女神同様の空中戦闘も可能とする。

ブラン（ホワイトハート）

ずっと前から…

辺りは暗くなり、夜空の星とルウイーの街の明かりが一層輝いている。

そんな中俺は、教会から少し離れた丘に座り、いつそ神々しささえ覚える景色をぼんやり眺めている。

「…はあ」

なんで夜中にこんなところでバカみたいに黄昏ているのかと言うと、理由は今日あった女神の集まりでの出来事だ。

今日の集まりは、各国の状況はどうなっているのか、ということの報告会のようなものだった。

ただの報告会なので、会自体はすぐに終わったのだが、やはりというかネプテューヌが…

「せっかく皆で集まったんだし、パーティーゲームしようよ！」

「…なにバカなこと言ってるよ。プラネテューヌと違ってラストイシオンは忙

しいのよ」

「…私も、遊ぶ暇があるなら早く仕事を済ませて読書したいわ。それに残してきたロムとラムが心配」

「あら、私は構いませんけど？」

「さつすがベール、わかっているう！それに比べてノワールは…。だからボツチなんだよ！」

「なんですって!?!いいわよ、そこまで言うのならやってやろうじゃない！」
相変わらずノワールはチョロすぎだろ。

「よшきた！プランもやろーよ、ねえ」

「…別にゲーム自体どうでもいいのだけどロムとラムが…」
ヴー、ヴー

ん？電話か。

「ちよつと悪いな、電話に出させてくれ」

「いーよー」

「悪い。…はい、どうした？」

『……………？……………』

「いや…ああ……………わかった、伝えておく…ふう」

「…誰から？」

「ああ、ミナからだった。長くなるようなら、こっちの心配はいらないってさ」

「…そう」

「じゃあじゃあ、ブランも参加できるよね！」

「…そういうことになるわね」

よし、面子は揃ったみたいだな。んじや、ここらへんで…

「なーにナチュラルに帰ろうとしているのかな？」

急いで帰ろうとする俺に、何の気配もなく近づいてきたネプテューヌが耳元で

囁く。

「————ツツ……」

強行——

「突破はさせないよー」

心を読んだかのようなセリフを言い、手首をがっちり掴まれる。

そして強制連行。

…わかってたさ、こういうときのネプテューヌからは逃げられないって。

「さて、人も揃ったことだし、やりますか！」

「ゲームをするのはいいいけど、何をするのよ？」

「そうですわね、TVゲーム…のようなものは見当たりませんね」

「…なんでもいいから早くして」

「なあ、帰っていいか？」

嫌な予感しかないんだよなあ。

「フツフツ、そう焦りなさんな。今からするゲーム…それは！」

「それは？」

「これだ！」

そう言い放ち、握りこぶしを掲げるネプテューヌ。その手には、棒が握られて

いた。

「じゃーん！【女神様だーれだ】」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

…予感的中。嬉しくもなんともねえよ。

「じゃあ、このゲームの説明を——」

「要らんわ！」

「ねぶ!?いくら君でも酷いよ!今回は私が主人公じゃないから、せめて目立と

うとしたのに!」

うわー、メタだ。

「それにしてもゲームでそのチョイスってオヤジっばいな」

「うら若き乙女に向かつて、オヤジっばいは酷いよ！だいたい——」

「おい、そこまでだ。これ以上は話が進まなくなる。」

「…そろそろいいかしら？」

「ああ、ノワールいたんだ？」

「いたわよ！ずっと！最初っから！ここに！」

「いやー、ごめんごめん」

「…はあ、もうネプテューヌのセンスはこの際どうでもいいわ」

「そうですね。さすがの私も予想外でしたわ」

「ねぶう…なんか皆して私の扱い酷くない？これでも一応主人公なんだけど

なあ」

「ああもう、わかったから。ほら、早く始めよう」

これ以上ネプテューヌ構ってたらいつまでたつても進まない。

「むう…いいもん！女神様になってきつい命令しちゃうんだから」

しまった。変なところでネプテューヌに火がついた。

「じゃあ皆、自分の分は選んだ？いくよー…」

「…」「女神様だーれだ！」「…」

見える。

「…しまった、俺は阻止できなかったか」

「…私のは違うわ」

「…ノワールと一緒よ」

「…あら、私も違いますわ」

俺、ノワール、ブラン、ベール、四人とも違う…となると

「まさか!？」

「…フツフツフツ。やっぱり持つてる主人公は違うね! 私が女神様だあー!」

瞬間、俺の顔に、俺だけじゃなかった。ネプテューヌを除く全員に落胆の色が

「私が女神様になったからには、生温い命令はなしだよ! それじゃあ…」
きつと爆弾を放り込んでくるだろうなあ。

「4番が2番に愛の告白だあー!」

やっぱりか。しかも俺が2番だし。

「ちよつと、ネプテューヌ!?! それ、どういふことなのよ!」

「おやおやー? 反応からしてノワールは確定だねえ。それもズバリ、4番!」

「うぐつ…」

「さあさあ、ノワールから愛の告白を受けるのは誰かなあ?」

「ここは黙秘を——」

「君！さあ！」

「なんでバレた!? 主人公補正にしても酷すぎだろ!？」

「わかったよ、告白を受ければいいんだろ」

「そうそう、わかっているじゃん！」

「うう……なんでよりによって……」

「さ、ノワール！ 覚悟を決めて……ってブラン？ なんでそんな落ち込んでるの

？ というか泣きそうに……」

「……別に落ち込んででもないし、泣きそうにもなっていないわ」

「そう？ それじゃあノワール、いつてみよー！」

「………わかったわよ！ すればいいんでしょ！」

「………」

「ブランがこつちをチラチラ見てるような気がするの、気のせいかな？」

「……ねえ」

「ノワールの告白が始まる。」

「ネプテューヌの煽りのせいで、なんかノワールが本気っぽいぞ、おい。」

「………好きよ」

「お、おう」
ノワールって演技上手いのか、知らなかった。思わず生返事で返してしまっただぞ。
とにかくこれで終わりに…

「貴方と初めて会った日からずっと、貴方を見ていたわ」
なつてない!?

ネプテューヌのせいで完全に演じきつてる!?

「二目惚れよ。でも、そんなの気の迷いだって思つて何度も否定しようとしたわ。でも、できなかったの。貴方への気持ちをご否定なんてできるはずなのにね…。ずっとと言おうか悩んでたけど…はつきり言うわ…貴方が好きです」

…迫真の演技だ。思わずドキツとした。

「…これでいいでしょ?」

「すごい!ノワールにまさかこんな特——」

——バンツ!!

すごい音がしたと思つたら、ブランだった。見るとブランの前の机が壊れてい

る。

「ど、どつたのブラン?いきなり——」

「負けないわ」

「へ？」

そう言うのとブランは立ち上がり、俺へと詰め寄ってきた。

「私だつて負けないわ！貴方と出会ったのは私の方が先よ。だからずっと、ずっと貴方を見てきたわ。貴方の優しいところ、かっこいいところ、素敵なところ……その他のところもたくさん見てきたわ！」

え？ちよ、ちよつと待て！なんでノワールと張り合ってるの!?

「ストツプだ、ブラン」

「………なによ……ノワールの方がいいって言うの？」

「いや、ノワールの演技に対抗心を燃やさなくてもいいだろ？」

「………ない」

「？何か言つたか？」

「………演技じゃない」

「え？」

「……私は演技じゃないわ。貴方のことが本当に好きなの……大好きなの……」

「「……ええええええ!!」」

演技じゃない？本当の告白？

た。

…ブランが俺を？

「……………」

顔を真っ赤にしたブランは何も言わずに女神化すると、窓から飛び去っていつ

「……………」

そのあとは、ゲームを続ける気になれず解散となった。

俺は頭を冷やすため、疑似女神化をせずに歩いてルウイーまで帰った。

ネプテューヌはとんでもない爆弾を放り込んできた。

長い間外に出すぎたようで、すっかり体は冷えている。

それでも、あの時のことを思い出すと体が火照ってしまう。

まだ景色を眺めていようと決めるとき、もう聞き慣れた声があった。

「…ここにいたのね」

「…ああ、ブランか」

気がつくくとブランは俺の背後にいた。

「中々帰ってこないから心配したわ」

「悪い、少しボーツとしたかったんだ」

「そう……」

そこで会話は途切れる。

「……ごめんなさい」

「……何がだ？」

「今日の報告会でのことよ」

「……あれか」

あの時の告白。それに俺は答えを言っていないかった。

「……あんな形だったけど、あの言葉は本物よ」

わかっている。あの時の声、目、全て本気だった。

突然、座っている俺にブランが覆い被さってくる。

「……どうしたんだ？」

「……いえ……なんとなくこうしたかったの」

「……」

「……」

そこから数分間、沈黙が続いた。

だがそれも、ブランの一言で打ち破られる。

「……返事……聞かせてもらえるかしら」

消え入りそうな声で耳元に囁いてくる。

「……いつからだったんだ？その…俺を好きになったのは」

「いつ…そうね、貴方と初めて言葉を交わして…初めて触れたときから…かし

ら」

「そうか」

俺は短くそう言い放つと、首に回しているブランの手をそつと、でもしつかりと握る。

「…そんなに前から好きでいてくれてありがとう。俺………ブランのこと好きだ」

これが俺の気持ち。

「…そう。ありがとう。私も大好きよ」

俺は振り返ると、ブランの目を真っ直ぐ見つめ、

そして…唇を合わせた。

愛しいから

ひたすら逃げていた。

この真つ白な大地から。大好きなルウィーから。

そして……女神から。

「はぁ、はぁ……くっ」

シエアの足場を形成していき、ひたすらルウィーから離れる。

「……くそっ！何でこうなったんだよ！」

全速力で逃げながら、こうなるまでのことを思い返す。

いつもと変わらなかった。

それは誰の目から見てもそう見えただろう。

ブランは元々短気で、それはブランと親しい者なら誰もが知っている。

ロム、ラムが本にいたずらした時。

ネプテューヌにからかわれた時。

ベールが胸を強調してくる時。

敵に対して。

親しい者が危険に晒されたとき。

こうしてみると、四六時中キレているようにも思える。

だが、ここにはもうひとつ例がある。それは、

ブランが好きな彼に他の女が近づいているときだ。

ノワールはそうでもなかったが、ネプテューヌ、パールがいたときは、心中穏やかではなかった。

だが、キレたとしてもその場にいる者は、いつものブランだ、そう思っていた。そうして誰にも気づかれないことなく、ブランの胸の中には黒くてモヤモヤしたものが溜まっていった。

その黒いモヤモヤは、次第にブランへ影響を及ぼしていった。

最初はネプテューヌ達へ対しキレる回数が多くなっていき、だんだんとネプテューヌ達を視界に入れるだけでキツく睨むようになっていった。

それはとうとう、身内の者にまで及んできた。

今までは、ロムとラムが近づく分には平気だったのだが、最近では、それすら許せなくなっていた。

そして、身内にまでキツくあたり始めたブランをさすがにおかしく思い彼がブ

ランを訪ねた時、事件は起きた。

「なあ、ブラン。最近どうしたんだ？」

「……どうした、というと？」

「ロムやラムにかなりキツくあたっていることだよ」

彼としては、何気なく言ったつもりだったのだろう。

だが、少なからず彼からの訪問で、気分が良くなっていたブランに、例え妹であらうと他の女の名前を出すのはいけなかった。

「……なんで」

おもむろに立ち上がりブランは彼へと距離を詰める。

「……なんで、他の女の名前を言うの？目の前には私がいるじゃない」

危険。そう思わせるブランの雰囲気には彼は思わず後ずさる。

一歩彼が下がる度に、一歩ブランが詰め寄る。

そしてとうとう壁際まで追い詰められた。

「ど、どうしたんだよブラン」

「どうしたもないわよ。全部貴方が原因なのよ」

そう言うブラン。その瞳には光がなかった。

「私がいながら他の女に優しくして……まあ、あいつらも悪いんだけどね。で

も、貴方だつて一緒よ？」

彼は驚きを隠せなかった。

ブランがこうなっていること。そして…ネプテューヌ達のことを「あいつら」と呼んだこと。

「お、おい、ブラン！ネプテューヌ達のことを…「あいつら」って…」

「でも、悪いのは私もよね。あいつらみたいに行動していればよかつたのに」
ブランは聞く耳を持っていなかった。

「だから…そうね、今からでも行動することにするわ。ねえ、貴方」
彼の話をまったく聞かず、彼の右手を取る。

そして、おもむろに持ち上げ…

ボキッ

へし折った。

「——ツツツ!!」

あまりに突然のことで、声にならない悲鳴が出る。

それでも、今のブランの近くにいないのは危ないと考え、迷わずブランを蹴り飛

ばす。

ブランは避ける素振りを見せずそのまま蹴りをくらひ後ろへ飛ばされる。

その間に距離を取る。

「はあ、はあ、いつつ!」

折られた右腕には激痛が走り、嫌な汗がどつと噴き出して来る。

「…痛いわね」

普段のブランなら、蹴られたらキレて襲いかかってくるのに、今はそう無感情に言い放ち、立ち上がる。

「痛かったかしら? ごめんなさいね。でも、抵抗しないで。そうしたら早く終わるから」

ゆっくり、ゆっくりと彼へと歩み寄ってくる。

その姿はこの世のどんなものよりも恐ろしく見えた。

「な、なんでだ、ブラン。なんでこんなことを…」

「なんで? って、そんなの私が貴方のことを好きだからよ」

「す、好き!?!」

「そうよ、好きよ。貴方だけが好き。他の誰よりも貴方が。今までは恥ずかしくて言えなかったけど、もうそんなの関係ないわ。貴方のことを考えるだけで私は幸せになれるの」

突然の告白。今じゃなかったら嬉しかっただろう。

「だったらなんでこんなー」

「でも…」

彼の言葉にブランは被せてきた。

「貴方が他のやつらといると、一変して絶望するの。何で貴方のそばに私が居ないんだろう、って。でもね、それと同時に怒りも湧くの。私の彼に何で近寄ってるの、何で？何で？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？」

「だんだんと私の胸の中には黒くてモヤモヤしたものが溜まっていったわ。それと同時に貴方を想う気持ちもどんどん膨らんでいったわ。そしてもう我慢できないの。私は貴方が欲しい。貴方のすべてが欲しい。でも、周りには邪魔者がたくさんいる。だったら、どうすればいいか…」

ずっと喋り続けたブランは、そこで一呼吸入れる。

「… 貴方を私のそばに置いておけばいい。永遠に、ね。そうすれば邪魔は入らないし、貴方と私は愛し合えるわ」

とびつきの笑顔でブランはそう言った。

「… 狂ってる」

「そうね。狂おしい程に貴方を愛してるわ」

もう、ブランに説得は無理だ。彼はそう思った。

ブランが話している間に少しずつ窓際へと移動していた。

「……目を覚ましてくれ、ブラン」

「無理ね」

即答だった。

「今の私にとって目が覚めるってことは、貴方への愛が冷めてしまうことと一緒なの。そんなの絶対に嫌」

その言葉は嬉しい。こんなにも思ってくれているのだから。

それでも、受け止めきれない。

「……そうか」

「諦めてくれたかしら？なら、おとなしく——」

「ごめんな、ブラン」

ブランが油断した一瞬の隙をつき、彼は窓から飛び出す。

その行為に驚くも、すぐさま窓際へ駆け寄るブラン。

その時にはもう、彼は疑似女神化を済ませ逃げていた。

そして、今に至る。

現在俺はプラネテューヌとルウィーの国境近くまで来ていた。

さすがにここまで来れば大丈夫だろうと思っていた。

そんな甘い考えをしていた俺を殴りたい。

「アインシュラク!!」

聞き覚えのある名前と共に影が射す。

瞬間、俺は着地なんて考えず横っ飛びに避けた。

直後、さっきまで俺がいた場所に衝撃がぶつかる。

あまりの威力に体勢を立て直すこともできずに吹っ飛ばされる。

ボールのようにバウンドし、木にぶつかる。そのときに、折られた右腕をぶつ

け、激痛に悶える。

「：：： ちっ、避けんじゃねーよ」

声の主はブラン、ホワイトハートの姿だった。

「あいつらのせいで少し出遅れたぜ、くそっ」

あいつら？ネプテューヌ達は違う。それぞれ自分の国にいるはずだ。だ

としたら………！

「つぐ……ブラン。お前……」

「……そこ、動くな、よっ！」

それと同時にブランが戦斧を構え飛び込んできた。

慌てて左手に持った刀で対応する。

互いに力が拮抗し、動きが止まる。

「ブラン！ あいつら」ってロムとラムのことじゃねえだろうな！」

ブランの言う「あいつら」、ロムとラムのことしか思い浮かばなかった。

「その通りだけど、それがどうした！」

「お前！ ロムとラムのこと大切にしてただろうが！ それを……」

たぶん、ロムとラムは俺のために、いや、姉のために戦ったんだ。

いつものブランに戻ってほしくて。

それなのに……

「私の恋路を邪魔するんならロムとラムでも関係ねえ！」

ブランは吐き捨てるように言った。

「…… だったらなおのこと、お前の愛を受け入れることはできねえ！」

はつきりとした拒絶。

言ってしまうてから、しまった、と思った。

途端ブランの力が抜ける。

「そ、そんな……嘘、だって……」

る。

俺の言葉がかなり堪えたんだろう。ブランは力なく座り込んだ。

「：： ソンナ、ウソ：： ワタシハ：： ワタシハ：：：：：」

ぶつぶつと呟くブラン。

とりあえずは落ち着いた。

「おい、大丈夫か、ブラン？」

そう言つて近づく。

：： 落ち着いた、なんて思っていた俺は本当にバカだった。

ブランを立てせようと手を伸ばした瞬間、伸ばした手を捕まれ引き寄せられ

「なっ!?：： つぐう」

引き寄せられ、逃げ場のない俺の腹に、ブランは容赦なくブローを叩き込む。

あまりの威力に、一瞬地面から足が離れた。骨も何本かやったようだ。

そのまま崩れ落ちる。

「つが：： な：： んで」

「カレガドコカニイク：： ナントカシナイト：：」

ブランは落ちていた戦斧を拾うと、倒れている俺へと近づいてきて：：

ブンツ：： —— ツ

両足を砕いた。

「ツツツツツツ!!!!」

右腕を折られた時以上の激痛に、俺は気を失いかけている。

突然ブランが俺に覆い被さり、顔を近づけてきて…

——チュツ

触れるようなキスをする。

「貴方はもうどこにも行けない。貴方は私のもの。私だけのもの」

耳元でそう囁かれる。

ああ、どこで間違えたんだろう。というか、どこでこんなフラグを…

『ねー、ねー、私おもったんだけどさ！ヤンデレにしたら怖い女神って、ノワー

ルとブランとおもうんだよね！』

『私もそう思いますわ』

『な!?!そんなことないわよ!』

『………』

『あ、あれ？ブ、ブラン、沈黙はちょっと怖いかなー、なんて…』

『…何でもないわ、気にしないで』

『そ、そう？よかったー!』

……あの時か。

「さ、帰ろうぜ。ワタシトアナタノ家に……」
薄れ行く意識のなか確信した。
もう元には戻れない、と。

旅を終えて――遠くに行かないで

ここ最近、ゲームギョウ界は大きな事件ばかりだった。

犯罪組織マジエコンヌの活動、犯罪神復活から初まり、零次元の事件まで……。

そんな中、一番行動を共にしたのはネプギアだった。

惹かれ始めたのはいつだっただろう。

ギョウカイ墓場にブランを始め、ネプテューヌ、ノワール、ベールが捕らわれ続け、その女神達を助けるために旅をしていたネプギア。

ルウィーでそんなネプギアの姿を見たとき、俺は震えた。それと同時に自分を情けなくも思った。

いくら、シエアが減らないようにするためとはいえ、ルウィーに籠っていた自分。そんな俺からすれば、ネプギアは眩しく見えた。

その時からだったのかもしれない。

そこからだった。ネプギア達の旅に参加したのは。

こんなこと言うのは間違ってるのかもしれないけど、旅は楽しかった。なにより、ネプギアと一緒にだったから。

旅が終わるのが惜しい。

そう思ってしまう時もあった。

でも、いい区切りなんじゃないか。そうも思った。

いくら自分の立場が女神に似ているからといって、国の象徴である女神に恋なんてしてはいけない。まして、他国の女神にだ。

旅が終わるとき、俺の想いも終わりにしよう。

そう思っていた。

だが、その気持ちに反して旅は続いた。正確には終わったが、また始まったというのが正しい。

旅はまだ続いている。

その事に嬉しく思いながらも、いつまでも未練たらしい奴だ、と心のどこかでバカにする自分がいた。

……零次元の事件。

これで、ネプギアとの旅も終わりか。

そう思っていた。だが、残念に思う面、長い時間で諦めることに決心がついた。

うずめを救い、ほんとの意味でこの世界に帰ってきた夜。俺はネプギアに呼び出されていた。

『……貴方が好きです』

……何の前置きもない真つ直ぐな言葉だった。

『……俺も、ネプギアが好きだ』

理由なんて聞かなかった。その時はただ、早く想いを伝えたい一心だったから。

そうして俺とネプギアは恋人になった。

「今思い返しても恥ずかしいな」

俺は今、ルウイーの教会の自室にいた。今日はネプギアからこつちに来るからだ。

「……失礼します。ネプギアさんがいらっしやいましたよ」

「ああ、わかった。ありがとう、ミナ」

「いえ、では伝えましたので」

そう言つてミナは部屋を出ていった。

「さて、迎えに行きますか」

ネプギアを待たせるのも悪いので早く迎えに行く。

部屋を出て、玄関の方に行くとか口論が聞こえてきた。

よく聞いた声。ネプギアとブランの声だった。

「あいつは絶対渡さねえ！」

「いいえ、諦めてくださいブランさん！」

「とつくにケジメは付いてる。それでも渡さねえ！」

「あの人との仲を裂こうなんて、いくらブランさんでも許しません！」

……何を恥ずかしい口論してるんだ。

なんだか最近、ブランが姑っぼくなってきたのは気のせいか？

「おーい、ネプギア！」

「あ……」

声を掛けると、すぐに満面の笑みを浮かべてくれる。

「それじゃあブランさん、また今度に」

「……つち」

……怖い。女同士って怖い。

「……玄関でなんて口論してるんだよ」

「だってブランさんが、あいつは渡さないぞ、って言ってきて、負けられないって思ったら自然と……」

「はあ……もう何度も口論になってるよな」

「ブランさんもしつこいんですよ！」

告白の次の日、ネプギアと恋人になったことをブランに伝えると……

『……ネプギアを連れてきて』

そして、ネプギアを連れてくると……

『……ネプギアと恋人になったのはほんとみたいね。……それでも言わせてちょうだい』

『私は貴方が好き。私が女神として生まれてからずっと……貴方に惚れていたの。……私と付き合ってください』

ネプギアはもちろん、俺も驚いた。あのブランが告白してきたのだから。それでも……

『……ごめん、ブラン。俺が好きなのはネプギアなんだ。この気持ちに嘘はつけない。だから、ブランの告白にも答えられない』

しつかりと断った。

ブランは小さく、掠れるような声でそうよね、と呟くと、一人にしてほしいと言ってきた。それと、

『……幸せになりなさい』

祝福もしてくれた。

……はずだったのだが、

「ブランさん……諦めてなのかなあ？」

さっきのようなことが何度もあっている。

「諦めてはいると思う……たぶん」

「むう、私不安です！ 貴方がブランさんに取られないか」

ネプギアがぷくつと頬を膨らませる。

「すごく可愛い。」

「大丈夫だよ、ブランもそんなことしないだろうし」

「うう、それでも……」

「俺はネプギアが好きだから」

ぼん、とネプギアの頭に手をおいてそのまま撫でてやる。

ネプギアは気持ちよさそうに目を細める

「えへへ……わかりました！ 貴方を信じます！」

話ながら歩いているうちに、部屋についた。

「お邪魔します」

「どうぞ」

ネプギアを部屋に入れ、椅子を用意する。

「えへへ……私今、すごく幸せです！」

「急にどうしたんだよ？」

「……こういう関係になるまで長かったですからね。なんだか急に幸せを感じたんです」

！」

そういうネプギアは本当に幸せそうだった。

「そっか」

「……貴方も幸せですか？」

不安そうに聞いてくるネプギア。その不安を打ち消すように……

「ああ、とつても幸せだよ」

「ならいいのです！ ……なんだかあの日のことを思い出しちゃいました」

「あの日って……告白のことか？」

「そうです。あの時はほんとにドキドキして大変だったんですからね？ 今でも思い出

すとドキドキしちゃいます」

「俺もドキドキしてたよ。大好きなネプギアからの告白だったんだから」

「も、もう！ そんなこと言つて、あの子の言葉、あれには私少し怒つたんですからね？」

「あれは……しようがないだろ」

返事をした後、少し心配に思つた俺は、いろいろ理屈っぽいことを言つてしまった。

『俺なんかでいいのか？』とか『仮にも女神が一般人と恋人はまずいんじゃないか』などだ。

その言葉にネプギアは、

『貴方だから好きなんですよ！ それに……女神だから、なんて理由で貴方のことを諦めたくなんてないです！ ……お姉ちゃんやいーすんさん、アイエフさんやコンパさんにはきつと迷惑掛けると思います。それでも！ ……私は貴方と結ばれたいです』

その言葉を聞いて、そんなことで悩んでた自分がばからしくなった。

今では堂々とネプギアの隣で笑っている。

「まあ、いいですけどね。……あの、隣に来ていいですか？」

「ああ、いいよ」

そう言つて隣へ来るネプギア。ネプギアからふわつと甘い匂いがする。

「えへへ……少し肩を借りますね？」

隣の俺の肩へ頭を乗せてくる。

「どうしたんだ？ また急に幸せを感じた、とかか？」

「それもありますけど……今、この時間を大切にしたいんです。今はまた平和になりましたけど、またいつ旅に出ることになったり、戦いになるかもしれないですよ？」

「……確かに、そうだな」

俺も、ブランの護衛という位置にあるが、それでも冒険家だ。そちらも疎かにはできない。今まではこのゲームギョウ界に関わる事件だったからネプギアとも一緒だった。

俺は冒険家、ネプギアは女神。

四六時中一緒というわけにはいかない。だから、今を大切にしたいと言ったのだらう。

「……俺も、そろそろ冒険家として旅にでなきゃいけないな」

その間、ブランたちとは離れることになる。当然ネプギアとも。女神がいち冒険家とずっと行動しているとなつては示しが見つからないだろう。でも……

——ギユツ

急にネプギアが俺の腕を抱き締めてきた。

「……いやです……旅になんて……出ないでください」

「……ネプギア、それは俺も一緒だ。旅なんてしないでネプギアとずっと一緒に過ごしたい。でも、それが無理なのはわかるよな？」

「……わかつてます……けど」

今日のネプギアは少し自分に正直だ。それだけ心を開いてくれてるってことだから俺としては嬉しいけど。

「ほら……ワガママ言わない。だったらその分、今を楽しめばいい。さつきネプギアが言ったことはそういうことだろ？」

「……わかりました。じゃあー」

いきなりテンションが変わったと思うと、さつきまで腕だけを抱いていたのが、普通

に抱きつく形になった。

「ちよ!?! ネプギア!?!」

「今、名一杯イチャつくことにします!」

ネプギアの抱きつく力がさらに強くなる。

それと同時に、女の子の柔らかさや匂いがいつそう強く俺を襲う。

いや、ほんと。襲うって表現で間違いない。

「さ、さすがに恥ずかしい……」

「照れてる姿、可愛いですね……えい!」

—— チュツ

「んな!?!」

いきなりネプギアが頬にキスをしてきた。

きつと俺の顔は真っ赤なんだろう。温度が2度くらい上昇したのかと錯覚するくらいだ。

いだ。

「いいじゃないですか、今までだって散々キスとかしてきたんですから、ね?」

首をコクンと傾げる。その姿を見るだけで俺はドキドキが止まらなくなる。

「貴方が大好きです! ……これからも、よろしくお願いしますね?」

目の前のネプギアが愛おしい。思考の全てをネプギアのことと埋め尽くされる。

だからこそ気づけなかった。

部屋のドアが少しだけ開いていたことに。

ずつと一緒にだったブランの隠された本心に。

とうとう旅への出発を明日に控えた今日。

ネプギアは「充電です！」と訳の分からないことを言つてここ数日間、四六時中引つ付いてきた。それでも煩わしいなんて微塵も考えなかった俺も相当なものかもしれない。

実際、ネプギアと一緒に入れて嬉しかった。

だけどさすがに恋人の俺と過ごしてばかりというわけにもいかず、今朝プラネテューヌへと帰つていった。少々というか、かなり名残惜しかったが、出発してから一度プラネテューヌに寄ると約束しているから寂しさも我慢できる。

ネプギアに元気のない姿を見せるわけにはいかない。考え事も程々にしてそろそろ寝なければいけない。

そう思い電気を消そうと椅子から立ちあがれば、控えめに扉をノックする音が聞こえた。

「こんな時間に誰だ？」

誰と言ってもここはルウイーの教会だから、来客はある程度絞れる。

「……私よ」

どうやら来客はブランのようだ。

「入っていいぞ」

「失礼するわ。ごめんなさいこんな夜中に」

ブランの格好は完全に寝間着だ。ブランももう寝ようとしているはずなのに一体何の用事だろうか。

「それは大丈夫だ。それよりどうしたんだ？」

「……」

用件を尋ねればブランは黙ってしまった。その間ジーンと目を見つめられる。

正直反応に困ってしまう。

「ブラン？」

「あ、ごめんなさい」

何なのだろうか？ 何かいつもと違うブランの様子を訝しんでしまう。

「体調でも悪いのか？ だったら今すぐミナに言って……」

「大丈夫よ。だからミナは必要ないわ」

風邪やらでぼーっとして思っているのかと思ったが違うようだった。

一体どうしたのかと考えていると、唐突にブランが言葉を発した。

「……また、遠くに行くの？」

突然で聞き逃しそうになったが、かろうじて拾うことができた。その言葉の意味することはすぐにわかってしまった。

「……ああ。これでも冒険家だからさ」

「……」

『遠くに行く』とは明日に控えた旅のことだろう。確かに、次の旅もかなり長いことかかってしまう予定だ。

ブランも、俺がいなくなることを寂しがつてくれているということに気恥ずかしさもあるが、嬉しさもこみ上げてくる。

「でも、また帰ってくるから。だから安心してほしい」

「……」

ブランは俯いてしまった。今までこんなことがなかったからどうしたらいいのかかわからない。だけど今日こうしてここにいてということ、今までの不安や寂しさが積もった結果なのかもしれない。

そう考えると俺がどうにかしないとイケないだろう。

あれこれ方法を考えたが、やっぱりこういう時はこれしかない。

そっとブランに近づき、優しく抱きしめた。

「大丈夫だ。大丈夫だから」

静かに語りながら、ブランが安心するように抱きしめ続ける。やっぱりハグの効果は抜群で、腕の中にいるブランから力が抜けていつているのがわかった。

よかったと、心の中で安堵する。

だからこそ、気が抜けてしまった。

その気が緩んだ瞬間考えてしまった。

今の状況に関して。

『ネプギアが見たらやきもち焼かせちやいそうな状況だな』

そんなことをつい、考えてしまった。

「っー」

瞬間、何かを感じて緊張が走る。

これはどこかで感じたことのあるものだ。

そう、これは……殺気のような。けどどこから？

「……そう、あなたはやっぱり遠くに行ってしまうのね」

「ブラン？」

一瞬だった。

グイッと引つ張られることに反応できず、視界がブランの顔で埋め尽くされた。ブランの息遣いを感じる距離。そして唇に感じるモノ。

そこまで認識したところでようやく何をされているのかを理解した。

俺は、ブランにキスをされている。

理解すると同時に反射的にブランを突き飛ばした。

離れてもなお今のことが信じられず、口元を手で覆う。

一方突き飛ばされたブランは、満足そうに頬を赤らめ、ついさっきまで俺と触れていたであろう唇をペロツと舐めた。

その光景に思わず一步下がってしまう。

「なに、を……」

ただどブランは俺の様子など気にも留めず、先ほどまで無口だったのが嘘のように語りだした。

「あなたの立場をわからせるためよ」

訳が分からない。

「あなたは私の護衛でしょ？ あなたの力はルウイーのものでしょ？ ならルウイーの女神である私のものでしょ？」

それがなんでキスにつながるのか理解できない。

「つまりあなたは私のモノなの」

「何を……いきなりどうしちまったんだよ！」

「こんなブラン……見たことなかった。」

「それはこつちのセリフよ。あんな雌に惑わされるなんて鍛え方が足りないわ」

「は？ おい、それは誰の事言ってるんだよ？」

「いくらブランといえど、狂いかけてるといつても、聞き逃せないことを言われた気がする。」

「誰って、あなたにまわりついてた雌のことよ」

聞き間違いなんかじゃなかった。ブランは確かに言った。ネプギアのことを『雌』呼ばわりした。

「ブラン！ いくら何でも言ってるいいことと悪いことがあるだろ！ ネプギアを雌呼ばわりなんて何考えてんだよ！」

「……さい」

「今のブランはどう見てもおかしいぞ！ 冷静になれよ！」

さすがにネプギアを、彼女を馬鹿にされて冷静にいられるような男じゃなかった。つい熱くなつて言い返してしまう。

だけでもし、ここで冷静にいられたら気付くことができたかもしれなかった。

「つさい……うるさい……うるさい！ うるさいっ！ うるさいっ!!」

癩癩のように「うるさい」と連呼するブラン。そして急にその体が光に包まれた。

やばいと思い、こちらも応戦すべく刀を手にするが、一手遅れてしまった。

女神化したブランに手にしていた刀は弾き飛ばされた。そしてそのまま俺の体に女神の全力を乗せた拳をめり込ませてきた。

さすがに疑似女神じゃないときに耐えきれぬ攻撃ではなく、地面から足が離れる。

「……つぐ、うおえっ」

声が出ない。力も入らない。ただ苦しみ悶えるだけだった。

めり込んでいた拳が離れ、ようやく地に足をつけることができるが、そのまま崩れ落ちてしまう。呼吸をしようにもうまくできない。整えようにも、息をすることが最早苦痛だ。どっと脂汗が噴き出るが、それを不快に思う余裕さえない。

そんな俺をブランはどう見ていたのかは知らない。

だけど、近くに気配を感じた。

と同時にガシツと掴まれてしまう。いまだ痛みが微塵も和らぐ気配のない俺に、ブランはまたキスをしてきた。

「……んう、ちゅ……ん」

しかもあろうことか舌を入れてきた。

「っ！……っ！……」

ただどやはり痛みを意識が向く。ただでさえ呼吸がまともにもできないのに、舌まで絡めてくるようなキスをされては苦しい以外ない。

既に酸欠状態だ。

ただど俺の状態など無視してブランは欲望のままキスを続けた。

鈍痛と酸欠、ブランにのしかかられて身動きできない状態と、先ほどまでは考えもしなかったあり得ない状況に晒され、次第に意識が遠のいていく。

ここで意識を失うことがどれほど危険かは理解していたが、理解しているからなんだという話だ。

あつさり俺は意識を手放した。

しばらく彼との熱い口づけを堪能して、彼の意識がなくなったことを確認してからゆっくりと離れた。

彼の顔は涙と鼻水と私と彼の唾液で汚れていたが、それに私は妙に興奮した。女神化を解いてから彼がきちんと息をしているか確認する。

「……大丈夫そうね」

脈はある。うまく意識を失わせるだけにできたようだ。

「始めからこうしておけばよかった」

私という存在が生まれた時から彼は傍にいた。

そしてその時から私は彼に惚れている。

運命としか考えられなかった。

なのに、横から茶々を入れられたのではたまったものではない。

近づくことは許そう。お喋りも許そう。二人つきりであるというのも、ギリギリ許そう。

だけど……恋人になる？

それは許していない。許さない。許すはずがない。

それはずっと彼と一緒にいた私だけのものだ。

それをあの『雌』は堂々と……。

「……やっぱり潰しておくべきかしら」

彼のためにもそのほうがいいかもしれない。

よし、そうしよう。

でもまずは彼を安全な場所に繋いでおかないといけない。

「……初めからこうすればよかった」

まあ、今からでも遅くはない。夜のうちに事を終えたいから急がないと。

「ずっと愛してるわ。起きたら、その時にも言っ
てあげる。私のこの気持ちはあなただけ
のものだから。だから、あなたの全てを頂戴、
ね？」

ピーシエ（イエローハート）

小さいおよめさん

「おにーちゃん！あーそぼ！」

「はいはい、何して遊ぶ？」

「えーとねー」

「私達も遊ぶー！」

「…遊ぶ」

…子供三人に囲まれるとなにもしてないのに疲れるから不思議だ。といって
もピーシエだけ何故か女神化してイエローハートの姿なんだが。

「えー！ピーはお兄ちゃんと二人で遊びたいのに！」

「なによ！私達も遊んだっていいでしょ！」

「…遊びたい」

「うー、しょうがないから遊んであげる」

「な!?!私の方こそピーシエと遊んであげるわよ！」

「ラ、ラムちゃん…」

か。

「むー、パイが遊んであげるんだよ！」

「私よ！」

「パイだもん！」

……いつの間に喧嘩が始まったんだ？ロムがオロオロして困ってるじゃない

「ふええ……」

「…ロム、向こうで本読んであげようか？」

ピーシエとラムの喧嘩はまだ続きそうだしな。

「うん！」

ロムをつれて子供部屋までいく。

「さ、どの本がいい？」

「えーとね、……これ！」

「んー？」

渡された本は見馴れない本だった。

割りとロムとラムに読み聞かせる機会が多い俺は、結構ロム達が持っている本を把握してただけど、この本は知らなかった。

「新しく買った本か？」

「ううん、違うの。それ、ピーシエちゃんがくれたの。ピーシエちゃんの本だって」

「そうなのか」

意外といえば意外だった。あのピーシエがわざわざロムとラムに物をプレゼントするとは思ってなかった。

「んじゃ、読むぞ」

「わくわく！」

ロムに読み聞かせながら、数日前のことを思い返していた。

あの時はとにかく驚いた。

いつものように突拍子もなくネプテューヌがやって来たまではよかった。

その背中から何か飛び出してくるまでは……

『おにーちやーん!!』

『へっ……ツゴフ』

飛び出してきたのは弾丸と化したピーシエであり、その勢いのまま、いまいち状況を理解していなかった俺の腹にヒット。

体力ゲージが消し飛ぶかと思つたぞ。

そこから、ネプテューヌの話によると、

いつものように遊ぶ。過ぎていたら、目の前に人が立っていてそのままパンチをくらったという。

そして、それがピーシエで、向こうで頑張っていたようで、纏まった休みが取れたから、こつちの次元に来たらしい。ちなみに、保護者として来たのは、やはりプルルートだったそうだ。

んで、ピーシエに行きたいところはあるかと聞いたところルウィーだったそう
で、今に至る。

ふと、体に何かぶつかかった。ぶつかかった方を見ると、ロムがこくり、こくり船をこいでいた。

「眠いんだったらお昼寝するか？」

「……う……ん」

「よし、それじゃベットに横になって……て、ありや」

そう言つてロムをベットまで連れていこうとしたが……

「……すー、すー」

既に眠っていた。

「仕方ないな。起こすのも可哀想だし」

起こさないようにそおつと抱っこして、ベットまで連れていく。ゆつくりとね

かせて、布団を掛けてやる。

「さて、あの暴れん坊の二人のどこに行きますか」

そう言つて、ロムが寝ていることを確認して部屋を後にする。

さて、二人の居たところに戻つてきたはいいけど：

「どこに行つたんだ？」

そこに二人の姿はなかった。

近くを探してもみつからなかった。

これは少しヤバイか、と思つていと

『負けないもん！』

『私だつて！』

二人の声が外から聞こえてきた。

安堵しながら表に出ると、たつた二人だけの女神戦争が始まつていた。

まあ、つまりは二人とも女神化をした状態で雪合戦をしているのだ。

ピーシエの方はイエローハートの時の持ち前の怪力で大きめの雪玉を作り、それをラムに投げている。

ラムの方はホワイトシスターになり、魔法で雪玉を大量に作りピーシエの方へ飛ばしている。

?

常人にはできないであろう、圧巻の雪合戦だが…

「…雪合戦程度に使われる女神の力ってどうなの…」
とりあえず、雪玉を二つ作って…それ。

「あう!？」

「きや!？」

俺の投げた雪玉は見事二人の顔にヒットした。

「むー、誰？」

「勝負の邪魔しないでよー!」

「お前らなあ、雪合戦くらいに女神化をするな!」

「あ、お兄ちゃん…」

「お兄ちゃん…」

大声出しすぎたか? いや、でも叱るときはちゃんとしなさいといけないよな? な

「ほら、そんなところに突っ立ってないで中に入れ。風邪引くぞ」

「…うん」

「…はい」

…そんなに落ち込まないでくれ。罪悪感で潰れそうになる。ピーシエに至つ

ては涙目だよ。

「……ほら、二人とも、こっちに来なさい」

「……」

「……」

「いいか？女神化は遊びで使っていていいものじゃないんだ。それは分かるよな

？」

「うん」

「分かってる」

「……本当にか？」

「うん」

「本当にわかってるよ」

「……だったらいんだ。でも、これからはこういうことダメだからな」

「……怒らないの？」

「私いけないことしたのに」

「確かにいけないことはしたな。でも、ちゃんと反省してるんだろ？」

「うん……ごめんなさい」

「私も、ごめんなさい」

「なら、いいんだ。…ほら疲れただろう？ ロムは一足先に部屋で眠ってるから、そうしたらどうだ？」

「うん！私、ロムちゃんのとこ行ってくる！」

よし、それじゃ俺はギルドに…

「あれ？ ピーシエは行かなくていいの？」

ピーシエが一人で残っていた。

「…だつてパイ、まだお兄ちゃんと遊んでないもん」

あー、そういえばそうだったな。

「そうか。じゃあ、遊ぶか？」

「…うん！パイ、おままごとする！」

「お、おままごとか。分かった」

正直、恥ずかしい。おままごとしてる姿をブランやネプテューヌとかに見られるものなら、余裕で旅に出るね。

配役はやはりピーシエが夫の妻で、俺が夫の役。

ピーシエが「あなた」とかの言葉を知っていたことにすごく驚いた。しかもことあるごとに抱きついてくる。…娘を持った父親の気持ちがあつた気がする。

そして現在、おままごとにも飽きたということ、俺の膝の上ののつてのんび

りしている最中だ。

「♪」

こうしてるだけでなんでそんなに楽しそうなんだ？

「そういえば、ピーシエ」

「なに？」

「ロムとラムに本くれたんだってな。ありがとな」

ロムとラムのことだ。ちゃんとお礼はいったんだろう。何となく俺も言ってしまうが。

「ふふーん、ピー偉い？」

「ああ、偉いぞ」

優しく頭を撫でてやる。そうするとピーシエは気持ち良さそうに目を細めて俺の方に体を預ける。

「ピーね皆のこと好き！ねぶてぬもネプギアもアイエフもコンパもお兄ちゃんも他の皆もみーんな！」

ピーシエらしい、そう思った。

「でもね！そのなかでもだーいすきなのがねぶてぬとお兄ちゃん！」

「そうかー、ありがとな、ピーシエ」

「うんー！」

そう言うとピーシエの体が光って…

「ちよ、ピーシエ!? 今女神化したら——」

突然イエローハートになったピーシエを支えきれず、そのまま倒れる。

「いてて」

「んふふ、ギユ〜♪」

「ちよ!? そんなに抱きつかれるとちよつと…」

口には出せないようなものがですね……くつ、これは不可抗力だ。だから何を思ってもいいはず……最……高……だ。

「〜♪」

「……………ハッ! ピ、ピーシエ、そろそろ」

「むー、まだ足りない!」

「いや、でもな……………」

「…………お兄ちゃんは、パイのこと嫌い?」

「い、いやそんなことないけど…」

そんなことないから涙目を止めてくれ。破壊力が…

「…嫌い?」

あー、もう!

「好きだよ!嫌いなわけないだろ」

半場やけくそだったけど、他の誰にも聞かれてないよな?

「……♪」

……まあ、こんな嬉しそうな顔してくれるなら、よかつたな。

「じゃあ、パイとお兄ちゃん、けっこんする!パイ、お兄ちゃんのおよめさんにな

る!」

「……………え?」

「お兄ちゃん大好き!」

「……………」 チュッ

「?!?!?」

え、今、俺、ピーシエにキスされた?しかも結婚?え?え?

「!!!」

あ、ダメだ。頭がおいつかない。顔が熱い。

「……………うーん……」

「♪あれ、お兄ちゃん?寝ちゃった?……………ふああ…パイも眠い……………すう

……すう……」

その後、先に起きたロムとラムによつてたたき起こされ、ピーシエにあの事を確認すると、すっかり覚えており、夢じやないことを確認させられた。

そして、長い休みも終わり、元の次元へ帰るときがきた。

ピーシエは俺のところまで来ると、

『お兄ちゃん、大好き！』

あろうことか大声で叫んで、さらに帰る直前に

『お兄ちゃん、やくそく、守ってね！』

…爆弾を置いて帰っていった。

その後、俺がどうなったかは言うまでもない。

プルルート（アイリスハート）

ぬいぐるみは…

俺は今、神次元のプラネテューヌに来ている。

イストワールが頑張ってくれたおかげで、二つの次元を自由に行き来できる装置が完成した。

その事を記念して、皆で休みを合わせ、プルルートのところへ遊びに行こうという話があったのだが、当日になって…

『ネプテューヌさんは仕事が山ほどあるから無理です！』

『えええ！そんなあ〜』

『お姉ちゃん、私も手伝うから…ね？』

『…はい、誰ってケイ？…！わかったわ、すぐに向かうわ！行くわよ、ユニ！』

『え？う、うん』

『……………わかったわ。…ロム、ラム、ミナが急いで戻って来てほしいって。貴方は残ってていいわ』

『ええ〜！遊びに行きたいのに！』

『ラムちゃん…がまんしよ?』

『…あ! いけません、四女神オンラインのイベントがありましたわ! 戻らなくては!』

『……………』

『…イストワールさん、どうしましょうか』

ということがあつて、俺以外全員が急用ができてこれなくなつたのだ。

それで、さすがにどうしようかと、神次元のイストワールさんに聞いたら…

『…そうですか。困りましたね。プルルートさん、ネプテューヌさんたちが来ると聞いてすごく嬉しそうにしてましたから…』

このまま行かないのもプルルートに悪いので、俺一人だけでも神次元へ行くことになつたのだ。

さて、こっちのイストワールさんは…いた。

「イストワールさん」

「ああ、来てくれましたか。…やつぱりネプテューヌさんたちは来てないんですね」

「すみません…ネプテューヌとベールはともかく、ノワールとブランは緊急の用事が入つたみたいで」

「そうですね…それなら仕方がないですね。でも、貴方だけでも来てくれてよかったです」

「ええ、さすがに楽しみにしてたプルルートが可哀想だったんで。俺だけじゃ役不足ですけど…」

当然俺だけと、俺を含めたネプテューヌ達とでは嬉しさが違うだろう。ネプテューヌ達とプルルート仲良かったし。

「あはは………実はそれほどでもなかったり…」

「何か言いました？」

「い、いいえ、なんでもないですよ」

なんか明らかにおかしい誤魔化し方だな。

「…じゃあ、プルルートに会ってきますね」

「あ、はい。部屋の場合はわかりますか？」

「わかりますよ」

「そうですね。では、プルルートさんをお願いしますね」

そう言うといストワールさんは仕事に戻っていった。

…あれ？プルルート仕事じゃないの？

疑問に思ったが、とりあえずプルルートの部屋に行く。

記憶を頼りに探していると、すぐに見つかった。

「…よし。プルルート、遊びに来…た…ぞ」

…この時俺は、なんでノックをしなかったのか自分を問い詰めていた。いや、ノックしたところでこの光景が変わるわけでもないんだが。

安心したのは、どこぞのゲームみたいな『着替えを覗いてしまった』じゃなかったことだ。

後悔したのは、なぜ扉を開けてしまったんだということ。

目の前の部屋はプルルートの部屋で、中央にはプルルートがいる。それなら普通の光景だ。

部屋に置いてあるぬいぐるみ。かなり多いが、プルルートの趣味を考えればこれも普通といえる。

だが、問題はそのぬいぐるみだ。…6:2:2の割合で偏りがある。最初の2はネプテューヌのぬいぐるみだ。そして次の2はその他かな？

…6のぬいぐるみはどこかで見たことがあるような顔だった。…いや、逃げるのはやめよう。どこからどうみても俺だった。

その俺によく似たぬいぐるみをプルルートが胸に抱いていた。

「ふふふ、まだかな〜」

…すごく嬉しそうですね。ぬいぐるみのモチーフとしてはなんとなく恥ずかしいけど。

俺に気づいてないみたいだし、声掛けないといけないよな。

「…おーい、プルルート?」

「ふえ?……………」

あ、固まった。

「…ええええ!?なんでえ!?どうして君がいるの!?」

いや、来るって知ってたよね?

「いや、どうしてって…」

「ノック聞こえなかったよ〜!」

「あ、ノックに関してはごめん、忘れてた。でも、入るとき呼んだんだけど、プ

ルルート気づかなかったよな?」

「そ、そうなの〜?でも〜…」

「…とりあえず、ぬいぐるみ置こうな?」

言った瞬間、いつもまったりしているプルルートからは想像できない早さでぬ

いぐるみを隠す。

「あう〜…あれ?ねぶちゃん達はいないの〜?」

「…そのことなんだけど」

俺は、皆急用ができて来れなくなったことを伝えた。

伝え終わるとプルルートは一瞬悲しそうな顔をしたが、すぐにいつもの笑顔

で、

よく

そう言ってくれた。

「ごめんな、また今度皆で来るから」

「うん。約束だよ？」

「ああ、約束だ」

「うん。とにかく入ってきて座れば？いつまでも立ってたらきついでしょう」

？」

「ありがとう」

プルルートのところまでいって向かい側に座る。

とりあえず、ネプテューヌ達のこととは大丈夫だな。

だけど…

「どうするか」

「なにが〜？」

「いや、皆で来る予定だったんだから、プルルートも何か計画してたんじゃないかなと」

仕方のないことだとしても、申し訳なくなる。

「ああ、そのことねえ〜。：確かに皆でやりたいことがあつたけど、大丈夫だよ〜」

「そうか？ごめんな、楽しみを潰してしまつて」

「もう〜、私は大丈夫だよ〜？さつきから謝つてばかりだよ君〜」
さつきから謝りっぱなしの俺に、少し不満の様子 of プルルート。

「せつかく来たんだから〜、楽しまないと損だよ〜」

「：それもそうだな」

これ以上謝つて、プルルートの機嫌を損ねることは避けたい。

アイリスハートになるのだけは勘弁してほしい。ほんとに。
「とうか、それにしてもすごい数のぬいぐるみだな」

「えへへ〜、そう〜？」

改めて部屋を見回すと、ぬいぐるみに圧倒される。それと同時にやはり俺を模したぬいぐるみが目につく。

「…あー、プルルート？」

「ん、な〜に〜？」

「ストレートに聞くけどき…なんでこんな俺のぬいぐるみが多いの？」
「事実なんだが、自分で言うのと恥ずかしい。」

「ああ、それはねえ〜…私ってぬいぐるみを作るのが好きなの〜」

「まあ、それは知ってるけど」

「でねえ〜…私がぬいぐるみを作る相手って〜、私の好きな人なの〜」

「へえ〜、そうなのか」

「ということは、その人のぬいぐるみが多いほど、プルルートはその人を好意に
思ってるってことで…ん？」

「…あれ？」

「…私〜、君のことが好きだよ〜」

「……な…へ？」

「だからあ〜、私は〜…君のことが大好きなの〜」
顔を赤くしてそう告げるプルルート。

対する俺は、突然のプルルートからの告白に頭が追いつかず、追いついたとき

には、

「…ええええ!?」

遅すぎるリアクションをしていた。

「え? 待て…告白? このタイミングで? なんで?」

「だって、君にこのぬいぐるみ達を見られてえ、もういいや、つてなったからあゝ」

「唐突すぎるだろ!?!」

「そうかな?」

「いや…でも、そうか…プルルートが…」

「そ、それで…どう?」

「ど、どうって…」

「私は君が好きで…本当に大好きで、お付き合いしたいけど」
そう言つて俺の方をチラツツと見る。その瞳は、怖そうに揺れていた。

「……………君が嫌だつて言うなら」

『嫌』その言葉を言う声は苦しそうだつた。

俺がぼさつとしてるから…プルルートはこんなにも…

「……………そ…そのときは…あ…あきらめ……………るか——」

「俺も好きだ!」

「…あ」

これ以上プルルートの悲しそうな顔を見たくて、苦しそうに絞り出すその言葉を大声で打ち消した。それと同時に自分の想いも伝える。

「俺も大好きだ、プルルート」

「…ほ…本当に？」

なおも不安気になっているプルルート。

それに俺は、安心させるように言葉を繋いだ。

「本当だ。この心に嘘はない。…実はな、今日プルルートと二人きりだつて聞いてドキドキしてた。俺へタレだからさ、ずっと前からプルルートに惹かれてたのに告白できなくて…さっきプルルートに告白されたときも突然だったのもあるけど、それよりも嬉しいってのが先にきたんだ」

「それで呆然として告白に返事ができなくて…プルルートを不安にさせてごめん！」

「…ほんとだよ…怖かったんだからね？」

「うん」

「返事がないから…告白したの迷惑だったのかな…って思ったよ」

「…うん」

「もし、嫌われたらって思ったら、だんだん怖くなってきて〜」

「ほんとにごめんな」

「……私こと好き？」

「ああ、大好きだ」

もう一度聞いてくるプルルートに、はつきりと告げる。

そうすると、プルルートの目に涙が溜まっていつて…

「…私も君のことが大好きだよ〜」

そう言つて俺の方へ飛び込んできて…

—— チュッ

…ネプテューヌ達に大きな土産話が出来たな。

そう思う俺だった。

ネプギア（パープルシスター）

旅を終えて

ここ最近、ゲームギョウ界は大きな事件ばかりだった。

犯罪組織マジエコノミの活動、犯罪神復活から初まり、零次元の事件まで…。

そんな中、一番行動を共にしたのはネプギアだった。

惹かれ始めたのはいつだっただろう。

ギョウカイ墓場にブランを始め、ネプテューヌ、ノワール、ベールが捕らわれ続け、その女神達を助けるために旅をしていたネプギア。

ルウィーでそんなネプギアの姿を見たとき、俺は震えた。それと同時に自分を情けなくも思った。

いくら、シエアが減らないようにするためとはいえ、ルウィーに籠っていた自分。そんな俺からすれば、ネプギアは眩しく見えた。

その時からだったのかもしれない。

そこからだった。ネプギア達の旅に参加したのは。

こんなこと言うのは間違ってるのかもしれないけど、旅は楽しかった。なによ

り、ネプギアと一緒にだったから。

旅が終わるのが惜しい。

そう思ってしまう時もあった。

でも、いい区切りなんじゃないか。そうも思った。

いくら自分の立場が女神に似ているからといって、国の象徴である女神に恋なんてしてはいけない。まして、他国の女神にだ。

旅が終わるとき、俺の想いも終わりにしよう。

そう思っていた。

だが、その気持ちに反して旅は続いた。正確には終わったが、また始まったというのが正しい。

旅はまだ続いている。

その事に嬉しく思いながらも、いつまでも未練たらしい奴だ、と心のどこかでバカにする自分がいた。

…零次元の事件。

これで、ネプギアとの旅も終わりか。

そう思っていた。だが、残念に思う面、長い時間で諦めることに決心がついた。うずめを救い、ほんとの意味でこの世界に帰ってきた夜。俺はネプギアに呼び

出されていた。

『…貴方が好きです』

…何の前置きもない真っ直ぐな言葉だった。

『…俺も、ネプギアが好きだ』

理由なんて聞かなかった。その時はただ、早く想いを伝えたい一心だったか

ら。

そうして俺とネプギアは恋人になった。

「今思い返しても恥ずかしいな」

俺は今、ルウイーの教会の自室にいた。今日はネプギアからこっちに来るから

だ。

「…失礼します。ネプギアさんがいらっしやいましたよ」

「ああ、わかった。ありがとう、ミナ」

「いえ、では伝えましたので」

そう言つてミナは部屋を出ていった。

「さて、迎えに行きますか」

ネプギアを待たせるのも悪いので早く迎えに行く。

部屋を出て、玄関の方に行くと何か口論が聞こえてきた。

よく聞いた声。ネプギアとブランの声だった。

「あいつは絶対渡さねえ！」

「いいえ、諦めてくださいブランさん！」

「とつくにケジメは付いてる。それでも渡さねえ！」

「あの人との仲を裂こうなんて、いくらブランさんでも許しません！」

…何を恥ずかしい口論してるんだ。

なんだか最近、ブランが姑っぽくなってきたのは気のせいか？

「おーい、ネプギア！」

「あ……」

声を掛けると、すぐに満面の笑みを浮かべてくれる。

「それじゃあブランさん、また今度に」

「……つち」

…怖い。女同士って怖い。

「……玄関でなんて口論してるんだよ」

「だってブランさんが、あいつは渡さないぞ、って言ってきた、負けられないっ

て思ったら自然と……」

「はあ……もう何度も口論になってるよな」

「ブランさんもしつこいんですよー」

告白の次の日、ネプギアと恋人になったことをブランに伝えると…

『…ネプギアを連れてきて』

そして、ネプギアを連れてくると…

『……ネプギアと恋人になったのはほんとみたいね。…それでも言わせてちょうだい。』

『私は貴方が好き。私が女神として生まれてからずっと…貴方に惚れていたの。…私と付き合ってください』

ネプギアはもちろん、俺も驚いた。あのブランが告白してきたのだから。それでも…

『…ごめん、ブラン。俺が好きなのはネプギアなんだ。この気持ちに嘘はつけない。だから、ブランの告白にも答えられない』

しっかりと断った。

ブランは小さく、掠れるような声でそうよね、と呟くと、一人にしてほしいと言ってきた。それと、

『…幸せになりなさい』

祝福もしてくれた。

…はずだったのだが、

「ブランさん…諦めてなのかなあ？」

さっきのようなことが何度もあっている。

「諦めてはいると思う…たぶん」

「むう、私不安です！貴方がブランさんに取られないか」

ネプギアがぶくつと頬を膨らませる。

すごく可愛い。

「大丈夫だよ、ブランもそんなことしないだろうし」

「うう、それでも…」

「俺はネプギアが好きだから」

ぼん、とネプギアの頭に手をおいてそのまま撫でてやる。

ネプギアは気持ちよさそうに目を細める

「えへへ…わかりました！貴方を信じます！」

話ながら歩いているうちに、部屋についた。

「お邪魔します」

「どうぞ」

ネプギアを部屋に入れ、椅子を用意する。

「えへへ…私今、すごく幸せです！」

「急にどうしたんだよ？」

「…こういう関係になるまで長かったですからね。なんだか急に幸せを感じたんです！」

そういうネプギアは本当に幸せそうだった。

「そっか」

「…貴方も幸せですか？」

不安そうに聞いてくるネプギア。その不安を打ち消すように…

「ああ、とつても幸せだよ」

「ならいいのです！…なんだかあの日のことを思い出しちゃいました」

「あの日って…告白のことか？」

「そうです。あの時はほんとにドキドキして大変だったんですからね？今でも思い出すとドキドキしちゃいます」

「俺もドキドキしてたよ。大好きなネプギアからの告白だったんだから」

「も、もう！そんなこと言つて、あの子の言葉、あれには私少し怒ったんですからね？」

「あれは…しょうがないだろ」

返事をした後、少し心配に思つた俺は、いろいろ理屈っぽいことを言つてしまつた。

『俺なんかでいいのか?』とか『仮にも女神が一般人と恋人はまずいんじゃないか』などだ。

その言葉にネプギアは、

『貴方だから好きなんですよ!それに…女神だから、なんて理由で貴方のことを諦めたくないんです!…お姉ちゃんやいーすんさん、アイエフさんやコンパさんにはきつと迷惑掛けると思います。それでも!…私は貴方と結ばれたいです!』

その言葉を聞いて、そんなことで悩んでた自分がばからしくなつた。

今では堂々とネプギアの隣で笑つている。

「まあ、いいですけどね。…あの、隣に来ていいですか?」

「ああ、いいよ」

そう言つて隣へ来るネプギア。ネプギアからふわつと甘い匂いがする。

「えへへ…少し肩を借りますね?」

隣の俺の肩へ頭を乗せてくる。

「どうしたんだ?また急に幸せを感じた、とかか?」

「それもありますけど…今、この時間を大切にしたいんです。今はまた平和に

なりましたけど、またいつ旅に出ることになったり、戦いになるかもしれないですよ？」

「…確かに、そうだな」

俺も、ブランの護衛という位置にあるが、これでも冒険家だ。そちらも疎かにできない。今まではこのゲームギョウ界に関わる事件だったからネプギアとも一緒だった。

俺は冒険家、ネプギアは女神。

四六時中一緒というわけにはいかない。だから、今を大切にしたいと言ったのだろう。

「…俺も、そろそろ冒険家として旅にでなきゃいけないな」

その間、ブランたちとは離れることになる。当然ネプギアとも。女神がいち冒険家とずっと行動しているとなっては示しがつかないだろう。でも…

——ギユッ

急にネプギアが俺の腕を抱き締めてきた。

「…いやです…旅になんて…出ないでください」

「…ネプギア、それは俺も一緒だ。旅なんてしないでネプギアとずっと一緒に過ごしたい。でも、それが無理なのはわかるよな？」

「…わかってます…けど」

今日のネプギアは少し自分に正直だ。それだけ心を開いてくれているってことだから俺としては嬉しいけど。

「ほら…ワガママ言わない。だったらその分、今を楽しめばいい。さつきネプギアが言ったことはそういうことだろ？」

「…わかりました。じゃあー」

いきなりテンションが変わったと思うと、さつきまで腕だけを抱いていたのが、普通に抱きつく形になった。

「ちよ!?ネプギア!」

「今、名一杯イチャつくことにしますー!」

ネプギアの抱きつく力がさらに強くなる。

それと同時に、女の子の柔らかさや匂いがいつそう強く俺を襲う。いや、ほんと。襲うって表現で間違いない。

「さ、さすがに恥ずかしい…」

「照れてる姿、可愛いですね…えい!」

—— チュッ

「んな!」

いきなりネプギアが頬にキスをしてきた。

きつと俺の顔は真つ赤なんだろう。温度が2度くらい上昇したのかと錯覚するくらいだ。

「いいじゃないですか、今までだって散々キスとかしてきたんですから、ね？」
首をコクンと傾げる。その姿を見るだけで俺はドキドキが止まらなくなる。

「貴方が大好きです……これからも、よろしくお願いしますね？」

ハーレム

逃げられない

いつこんなフラグを建てたのか、それはわからない。ただ言えることそれは、俺は過去最大の身の危険を感じているということだ。

「どうしたの?」

俺の部屋にはネプテューヌが居た。

寝ている俺の上に馬乗りの状態で…。

そして俺は両手両足を拘束されている。いくら力を入れてもびくともしない。

「解こうとしても無駄だよ?」

そう言うとなぷてゅーヌは俺の頬に手を添える。そして…

—— チュッ

「?!?!」

キスをしてきた。

「えへへ…君とのキス…ドキドキするよ」

嬉しそうなネプテューヌ。でも、その瞳には光がなかった。

「な、なんで——」

キスをした？

そう言い終える前に、ネプテューヌが言葉を被せてくる。

「君のせいだよ？」

まったく見に覚えがなかった。

「その顔は気づいてない顔だね。いいよ…教えてあげるから」

「君は誰にでも優しいよね…私だけじゃなくて。ブラン達は仕方ないかもだけど、ノワールやベール、ネプギアやユニちゃん、アイちゃんたちにも…。でもね、そんなの嫌だった。貴方が優しくするのは私だけがいい…そう思っていたんだ」

「君の全ては私のもの。君の体も…心も全部。君の優しさは私だけに向けられるもの。君の温かさは私だけを温めるもの。そのはずなんだよ…それなのに…それなのに!!」

「君はいつまで経っても私だけを見てくれない！私はこんなに君だけを見ているのに！君はいつまで経っても私だけを想ってくれない！私はこんなにも君だけを想っているのに！」

「…だからこうするしかないんだ。君を私だけのものにする。君の中に私を刻み込んであげる」

全てを一気に言い終えると、ネプテューヌはゆっくり立ち上がる。
「だから……少しの間眠っててね？」

——ドゴツ

「うつ……」

ネプテューヌは自分の拳を俺の腹に叩きつけてきた。

あまりの威力に、一瞬気を失いかける。

ネプテューヌとしては気絶させるつもりだったのだろう。

だが俺は辛うじて気絶はしなかった。

「ふふふ……おやすみ。次に目が覚める時は、君は私のものだよ」

やはりネプテューヌだった。

俺が気絶していないことに気づいていない。

仕方ないか……ここは気絶したのを装って打開策を考えるしかない。

そんな俺をネプテューヌは抱えると、女神化し窓から飛び立つ。

夜の風は冷たい。飛んでいるということもあつてかなり冷え込んでいる。

そうして数分間飛んでいると、急にネプテューヌが止まった。ルウィーからプ

ラネテューヌまではまだ距離があるはず。

もしかしてバレたのか？

その問いに答えるようにネプテューヌが喋る。だが、それは俺ではなく、他の誰かへ対してだった。

「…彼のことだから邪魔者が来るだろうと思っていたけれど…貴女とはね」
どうやらバレた訳じゃなく、誰かがやって来たようだ。

「そこをどいて…と言って聞いてははくれないんでしようね」

「あらあ？よおくわかつてるじゃない」

「このしゃべり方…プルルートか。」

助けに来てくれたのなら嬉しいんだが…ネプテューヌのこともある、油断はできない。

「そうね、よく知ってるわ。同じプラネテューヌの女神、それに…私には劣るけど彼に恋してる邪魔者だもの」

「…何を言ってるのかしら？劣る？私が？貴女に？」

「そうよ。私以上に彼のことを想っている人はいないわ」

「…好き勝手に言ってくれるじゃない。これはお仕置が必要、ねえ!!」

ふと、今どうなっているのか気になりうつつすら目を開ける。するとまさに今、アイリスハートの姿のプルルートがネプテューヌ…つまりこつちに斬りかかっていた。

「…ッ！」

ネプテューヌは咄嗟に回避行動をとる。だが、俺を抱えている状態のため行動が遅れて、攻撃は俺を掠める。

「…ぷるるん、貴女…彼に傷をつけたわね」

「ねぶちゃん避けからよ？」

「言つてなさい。彼を安全なところへ置いてから貴女を消すわ」

「そうねえ…私も彼を巻き込むのは本意じゃないからいいわよ」

「どうやらネプテューヌ達は俺を置いてから戦うらしい。」

それは好都合だった。

さっきのプルルートの攻撃で、手の拘束具が壊れかけている。後は力を入れれば簡単に壊れそうだ。

そうとは気づかずネプテューヌは、俺を木の根もとに寝かせる。

「もう少し待っててね」

そう言うネプテューヌは、俺に軽くキスをして飛び立っていった。

「待たせたわね」

「…ねぶちゃん？さっき彼に何をしたのかしらねえ？」

「何って…キスに決まってるじゃない。彼は私のなんだから」

「……いくらねぷちゃんでも許せないわね。さつきから本当に好き勝手に言ってくれちゃって〜」

「好き勝手にもなにも、事実よ」

「……いいわ、ねぷちゃんを消してから彼を手に入れば全て丸く収まるんだし…ねぷちゃんにはきつ〜いお仕置きをしてあげるわ〜！」

「それはこつちも同じ、よー！」

上空ではプラネテューヌの女神二人の戦いが始まった。

戦闘になったことを確認し、手に力を込め、拘束具を壊す。

自由になった手で刀を呼び出し、足の拘束具も壊す。

「ふう…ようやく自由になった」

上を見ると、プラネテューヌの女神の戦いは熾烈化していた。

互いの武器がぶつかり合い、隙を見ては攻め、互いに一步も引かないものとなっていた。

二人の女神としての力はトップクラスといってもいい。

ネプテューヌはブラン達三人の女神を相手にして渡り合える程の実力がある。

プルルートの霧囲気とか性格も原因ではあるが、その強さでもこつちの女神達が恐れるくらいの実力がある。

とても二人を相手するのは無理だ。

今のうちにこつそり逃げるしかない。そう思った。

俺はネプテューヌ達を甘く見ていた。病的にまで狂ってしまったネプテューヌ達を…。

とにかくこの場から離れよう。そう思い振り返ると…

「どこに行くのかしら？」

「ッ！」

プルルートと戦っていたはずのネプテューヌが目の前にいた。すると今度は

…

「勝手に逃げようだなんて、悪い子ねえ〜」

背後からプルルートの声がした。

「な…なんで…」

ついさつきまで戦っていたはずの二人は俺を挟む形で立っていた。

「なんで、つて…貴方に逃げられちやもとも子もないじゃない」

「だから仕方なくお仕置き時間を止めて、ねぶちゃんと共同戦線を張ったの

よ〜」

「その後で決着はつけなければいいのだし、ね」

信じられないが、あの戦いの最中に俺に気づいたということだ。しかも共同戦線だという。

もう逃げられない。そう思った。

数でも質でも負けているこの状況。打開策なんて何も無い。

「あらあ？抵抗しないのかしらあ？」

「……」

「まあ、その方が私たちにとつて都合がいいのだから構わないのだけど。ふるん、とりあえず彼をプラネテューヌまで連れていくわよ」

「わかったわ。…少しの間眠ってもらおうかしらあ！」

「ぐっ……」

動かない俺の腹をプルルートは容赦なく蹴る。

今度こそ意識が遠のいていく。

薄れていく意識のなか俺は、もう戻れない、そう思った。

「ふふふ……」

「うふふ……」

プルルートに気絶させられてからしばらく経って、俺は目を覚ました。

「ここは……どこだ？」

辺りは薄暗くよく見えない。プラネテューヌなのは間違いないだろう。

「…手足は……拘束されてるよな」

俺の手足を拘束しているものは、ネプテューヌが付けた拘束具よりも頑丈そう

だった。

「あ……起きた？」

「おはよ〜」

どうやら部屋のなかにはネプテューヌ達もいたらしい。そして近づいてくる

と……

——チュツ

「——っ。えへへ……おはようのキスだよ！……どう？」

「——っ、いきなりな——!？」

——チュツ

「えへへ……私も〜」

「美少女二人からおはようのキスとはやりますなあ……このこの〜」

「……」

「ありやく、拗ねちゃった？」

「機嫌直してよ」

「……だつたら今すぐこの拘束を解いて、俺をここから出せ」

「…それはダメだよ」

「…そういうの以外だつたらなんでもするよ？ご飯もあげるしく、体も洗つてあげるしく、他にもいろいろ」

「そんなのどうでもいい。俺を出してくれ！」

「…しつこいな」

——ガスッ

「うっ…」

出してくれとなおも食い下がる俺に、ネプテューヌは蹴りを入れる。

「ごめんね、痛かった？でも、しつこい君も悪いんだよ？」

「ああ、ねぶちゃんだけ蹴つてずるい。私も蹴りたい」

「じゃあ、次の時はぶるるんが蹴つていいからね」

「うん！わかつた」

「う…なんでこんなことを…」

蹴る力が結構あつたため、喋るだけでもキツイ。

「なんで、つて…言つたでしょ？私は君が好きなの」

「私もだよ」

「君が他の女と仲良くなるなんて我慢できないの。…ぶるんは別だけど」

「…どうしてプルルートだけだ？」

「少し説明不足だったよね。君を連れ去った時まではぶるんでも許せなかったよ！だから邪魔してきたときは消そうとした。途中で君が逃げようとしたから仕方なく共同戦線を張ったけど、君をプラネテューヌに連れてきてから決着をつけようとしたんだ！」

「もうねぶちちゃんしぶとかったよ」

「それはこっちのセリフだよ!?丸一日戦つても決着つかないんだよ!」

「彼を渡すわけにはいかないからね」

「…はあ。それで決着つかなかったから私とぶるんだけ君を独占しちゃおう、つてなったんだよ」

「……」

話を聞くに、俺は最低でも一日以上は寝ていたということだ。だとすれば、俺がいないことに気づいたブラン達が助けに来てくれるはず。それにかけるしかない。

「もう、君も強情だなあ。聞くだけ聞いてだんまり？」

「…もしかしてえ…ブランちゃん達とかが助けに来てくれるかも、とか

思ってるのかな〜？」

「ふふふ、無駄だよ？この場所は誰にも見つからないし、もし来たとしても私とぶるるんで消しちゃうんだからね！」

「な……」

今の二人なら本当にやってしまおうだろう。

「……♪今の表情ぞくぞくするね〜。…あ、そうだ〜。先に消しておけば〜、安心だ〜」

「あ、ぶるるんナイスアイデア！」

「や、やめろ！」

「え〜…でもなあ〜。君も言うこと聞いてくれないし」

そう言つて俺を見てくるネプテユース。

「くっ…交換条件か」

「本当はしたくないんだけどね〜…それで、どうするの？」

「……」

このままなんて本当は嫌だ。ルウィーに帰りたい。でもブラン達が……

「………ぶるるん」

「は〜い！」

「ま、待ってくれ！………わかった。言うことを聞く……だからブラン達には手を出すな」

俺が犠牲になってブラン達が救われるなら…。

「うん！いい返事が聞けてよかったよ！」

「うふふ、じっくり遊んであげるね」

俺は一生ネプテューヌとプルルートと一緒に生きていくしかなかった。

俺はこれから壊れていくだろう。二人の女神の狂気的な愛に晒されて。

後悔ばかりだ。やり残したことはたくさんある。それも今ではできない。で

も…

最後に…届かないかもしれないけどこれだけは…

…ブラン、ロム、ラム、他の女神達…今まで楽しかった。ありがとう。

暗黒星くろめ

くろめ救出

「ねぶっちー！」

「うずめー！」

俺の目の前でうずめとネプテューヌが嬉しそうに抱き合っている。

事件の後、無事うずめは復活することができた。

ゲームギョウ界は救われ、うずめは復活した。…まさしくハッピーエンド。

……でも納得できない。救えてないやつが一人いる。

それは俺たちの敵であり、ゲームギョウ界の敵でもある。目の前で喜んでいるうずめと瓜二つ。負の感情から生まれた一人の少女。

暗黒星くろめ。

今回の事件の犯人でもあり、被害者でもある俺は思っている。

人々に望まれ生まれた女神。それなのに、ただ危険だから、それだけの理由で封印されたり存在が無かったことにされたりした一人の女の子。そこから生まれたくろめも充分被害者なんだ。

被害者なら俺は救いたい。

方法はある。けどその前に…

「…：…なあ、聞きたいことがある」

「なになに？どうしたの？」

「…落ち着いて聞いてくれ」

「…なにか重要なことなのね」

俺の雰囲気は少し違うことに気づいた全員がこつちを注目する。

「…プランたちは…：…くろめについてどう思っている？特に、プラネテューヌ
の女神のネプテューヌ達には聞いておきたい」

言った瞬間皆の動きが止まる。

「…：…どういうこと？」

不安げに聞いてくるネプテューヌ。たしかに理由を言っただけでなかったな。

「率直に言うと、俺はくろめを救いたい」

「な、なに言ってるのよ!？」

「…少し落ち着いたらもうですよ、ノワール」

「落ち着いてなんていられないわよ!」

これは仕方ないことだ。ノワールの反応が当然だからな。でも…

「…俺は…くろめも被害者だと思ってる。たしかに今回の事件の犯人はくろめだ。それは変わらない。でもそうなるような原因を作ったのは女神を信仰する人々だ」

「自分が望んで生まれた女神が危険だからという理由で身勝手に封印までする…たとえどんな人だろうと恨みもするし憎みもするだろうさ。くろめは犯人であると同時に被害者なんだ。だからといってくろめがしたこと重さは消えない。その重さを償う意味でも俺はくろめを救いたい」

「それに…くろめはれっきとした一人の女の子だ。人なんだよ。この世界にちやんといるんだ。たとえ憎しみだろうと、感情があるんだ。そんなくろめを俺は救いたい」

俺の思いは伝えきった。これで駄目なら…

………

「……俺も救いたい」

沈黙のなか、真っ先に声を出したのはうずめだった。そこからだった。

「私も！私も！」

「…あなたの言っていることにも一理あるわね」

「私は構いませんわよ？」

最初に賛同してくれたうずめを筆頭に、ネプテユース、ブラン、ベール。四人が賛成してくれた。そして最後は…

「…うー、わ、わかったわよ！どうなったって知らないんだからね！」

「…ありがとう、皆」

「それで…具体的にはどうするの？」

「まず大量のシエアが必要だ」

「シエア…ね。それだったら私たちの国から…」

「それが…国一つ分なんだ」

俺の一言に皆が凍り付く。それも仕方ないだろうな。

「詳しく説明すると…」

「まず、今のくろめには実体がない。うずめの中に微かにくろめの存在があるだけだ」

「へー、そうなのうずめ？」

「ああ、そうだ。小さいが、確かに感じてるぜ」

「その実体がないうずめをどうやってこっちに呼び出すか。分かりやすくいえば、概念だけのものをどうやって形にするか、そこでシエアが必要になるんだ」

「…少しわかったわ。ようは私たち、つてことね」

「…どういうことですか?」

「正確には私たちという存在よ」

「私たちの存在…:…っ!…:女神…:なの?」

「えー、なにになに? 何なの?」

「??俺にもさっぱりだぜ」

プランたちはわかったようだけど…:ネプテューヌとうずめ…:。プラネテューヌの女神はもう少ししつかりして欲しいと思う。

「つまりは女神が生まれる原理を使つてうずめをこっちに呼び出す」

「なくんだ、最初っからそう言つてよね」

「…:女神が生まれる原理。多くの人の願い、それが集まったもの、シエアエナジーによつてこの世に生まれる」

「え!?!無視? 無視なの?」

いや、わかるよね? 今真剣なとこだよ。…:無視が効いたのか隅っこで小さくなつてよ。

「だからこそその国一つ分のシエアエナジーなのです」

「ああ。一人の女神を生み出すためにはそれくらいといけない」

「だったら尚更私たちのシエアエナジーを…」

「いや、いい」

俺の我が儘に大事な国のシエアは使えない。それにいくらか4カ国で少しずつ出すといつても、国一つ分の4分の1のシエアは決して少なくはない。

「…そうは言っても大量のシエアエナジーをどうする気？」

「そうだな、それについても説明する。シエアは俺一人、俺の刀のシエア増幅装置をフルに使って限界まで増やす。……ただ…」

「なんなのよ？」

「はつきり言くと、失敗する可能性が高い」

「えー、必ず成功するんじゃないの!？」

もう復活してきたよ。相変わらず早い…。

「それぐらい難しいんだ。人為的に女神を作るのは」

「デメリツトは他にありませんの？」

「……………ない。安心してくれ、というのも変だな」

「でも、私たちだけ黙って見てるってのもあれなんだけど」

「そうよ、何か私たちにできることはないの？」

正直ありがたい申し出だ。普通だったら素直に受け取っていただろうな。

「……………そうだな、祈っていてくれ」

「…祈るだけ？」

「ああ。女神のお祈りがあるなら結果もすごいものになるはずだよ」

「でも…」

「祈るだけつてのも…」

尚もブランとノワールは食い下がってくる。

「もう！ブランもノワールも別にいいじゃん！本人が大丈夫だ、つて言ってるんだから信じて任せようよ」

…ほんとこういうときにありがたい存在なのがネプテューヌだよな。だから憎めない奴なんだ。

「ネプテューヌの言うとおり、俺を信じてらせてくれ」

そう言つて頭を下げる。

「…わかったわ」

「ちよつとブラン!？」

「彼が任せてくれ、つて言ったのよ。私はそれだけで十分だわ」

「…はあ、もう。だったら私からは何も無いわ」

「ありがとうな、二人とも」

「え、私は？」

「わかってるよ、ネプテューヌもありがとうな」

「そうそう、感謝は忘れないようにね」

「すぐ調子に乗るから台無しだよ。」

「あ、後ベール。ありがとうな」

「どうしたんですの？」

「いざというとき俺のフォロワーができるようにしてしてくれたんだろ？」

「…気づいていましたのね」

「まあな。さて……実行するか」

「お、おい…俺は何かするのかわ？」

「今回の重要人物、うずめ。」

「ああ、うずめには大事な役がある。うずめの能力を使ってくるめが実在すると“妄想”して欲しい。それだけで成功率は上がるはずだ」

「正確には、うずめの“妄想”を借りてようやく成功する確率が出てくる、だ。それくらいやろうとしていることは難しい。」

「わかった」

「……皆、俺の我が儘を聞いてくれてありがとう」

「深く頭を下げる。」

「えー、いきなりどうし——ムグツ」

「今は黙って聞きなさいよ！」

…相変わらずのネプテューヌ、そして息ぴったりなノワール。
いつも通りだな。

「ははは、確かにいきなりだったな。……まあ、いいか。何か話そうとしたけど
忘れたよ」

「何なの、締まりのない……」

「あなたらしいといえばあなたらしいですわね」

「会ってまだそんなに俺ですら思っちゃまったぜ」

「いや、そこまで言わなくても……」

「……もう！なんなのこの空気！ほんとに助ける気あるの?」

現在進行形でネプテューヌを物理的に押さえているノワールが叫ぶ。

「わかってるよ………よし………それじゃあ、くろめを助けようか」

俺がそう言うと、周りの空気が一気に張りつめる。…約一名騒がしいが……。

場を静寂が支配する。

擬似女神化をし、準備を整える。

刀を鞘から抜き放ち、床へと突き刺す。

「……うずめ、俺の手に自分の手を重ねてくれ」

「わかった」

うずめが近づき、刀を握る俺の手にそつと自分の手を重ねる。

これで最初の段階は完了した。

問題は次からだ。

うずめの中にいるくろめへと俺のありつただけのシエアエネルギーを送るとい
う行程。実はこれにはかなりのリスクが伴う。

一つ目は、さつきもいった通り、失敗の可能性が大きいこと。これはネプ
テューヌ達にも言っている。……問題は他のリスクだ。

二つ目は、シエア増幅の負荷に耐えきれなくなった刀が砕けること。それは俺
の戦う力の大半を失うこと。それに、くろめを救う手段がなくなるということだ。

三つ目は、俺が死ぬかもしれないということ。理由は簡単、シエアの負荷に耐
えられないかもしれないからだ。自分のシエアを刀へ流し、何十、何百、何千、何万倍
にも増やし、自分の体へ戻してくろめへと送り込む。

常人ならシエアの多さにパンクするだろうが、俺は半分女神みたいなものだ。
それでも耐えられるかわからないが。それに死ななかつたとしてもあまりの負荷に、今後

シエアを扱うことができなくなるかもしれない。それは擬似女神化もできなくなるということ。

…つまり、最高は俺は無事で、くろめも助けることができたとき、最悪はくろめを助けられず、俺も死ぬとき。

さつき言わなかったのはこのためだ。

自惚れじゃなかったらだが、ネプテューヌたちはこのことを知れば絶体納得しなかつたと思う。

でも、俺はくろめを救いたい。そして、俺たちの仲間になつて欲しい。

その願いを叶えるためにもくろめは助ける。

…たとえそのときに俺がいなくても。

「……今からうずめの中にいるくろめにシエアエネルギーを送る。うずめには何の影響もないから安心してくれ」

「ああ」

「……始めるぞ」

その宣言と共に、刀が淡く光る。通常時なら光つたりすることはないが、あまりのシエアの量で少しシエアが漏れている。その漏れたものが視覚化しているだけだ。

周りの皆は何も喋らない。俺が集中できるように気をつけているのだろう。

そんな中、着々とシエアを送る行程は進んでいった。

・・・・・・・・

体感的にはもう一時間以上経っているような気がするが、実際には数分しか経っていないのだろう。

あまりのシエアの量に潰れそうになる。苦痛は長く感じるというが、本当にやばい。無限に続くとも思われる中で耐えるというのはかなりのキツさだ。

「……大丈夫か？」

予想以上のキツさに、かなり辛そうな顔をしていたらしい。うずめが心配して聞いてくる。

「……だ、大丈夫……だ」

嘘だ。

自分のシエアを使いシエアを増やし、膨れ上がったシエアの量に耐え、それをくろめへと流し込む度に襲う脱力感。

最初は、辛うじて生き残れるようなビジョンがあったが、今ではそんなものはない。本当に死力を尽くさないと最悪のバッドエンドになりそうだ。

「……りや俺が生き残るのは無理かもな……」

その呟きは誰にも聞かれてはいなかった。

ただ、俺は覚悟を決めた。

本当に全力でいく。くろめを救うことだけを考える。自分の身は知ったことではない。

込めるシエアをさらに多くしたとき……

「…ツツ！」

今までで一番酷い脱力感が襲ってきた。

「お、おい！」

片膝をついて、なんとか倒れるのだけは防ぐ。その間も刀は離さない。

「もうやめなさい！」

「そうよ…見たところこれ以上は貴方の体が…」

静かに首を横にふる。

「そこまでしなくてもいいじゃありませんの！」

「そうだよ！それに少し調べれば他の方法があるかもしれないよ！」

それにも首を横にふる。

「…：…なんでそこまでするんだよ」

そんなの決まってる。

「…助け…：…たい…：…から」

俺の一言にネプテューヌ達が息をのむ。

……話している間にも、終わりが近づいてきた。もうすぐシエアが送り終わる。

……俺のシエアは……かなりギリギリだな。でも、どうにか最後まで持ちそう
だ。

「……………」……………「………終った」

俺の一言に全員に緊張が走る。やるべきことを終えた俺は刀を支えにして立っている。

しばらく場を静寂が支配する。

「……なんだこれ？」

うずめの胸の辺りに光が集まってきた。それは段々と大きくなり、眩しくなっていく。

「……もしかして」

「ああ、成功したんだろう」

ネプテューヌの言葉に肯定で返す。

光はうずめから離れ空中に留まると、少しずつ一人の少女の形を形成していく。そのシルエットはうずめとそっくりだ。

皆が固唾をのんで見守るなか、光は完全に少女の形となり…

「……………！眩しッ!？」

眩い閃光を放った。

「ねぷ!?!目がく、目がく」

「ちよ、いきなりなんなのよ!」

「…少しチカチカするわね」

「あらあら、情けないですわね」

「えく、べールずるい！一人だけサングラスしてるなんて!」

「そうだぜ！俺にも貸してくれ!」

「…………プラネテューヌの女神二人とべール、漫才は外でやってくれ」

皆が思い思いに騒ぐ。

そんななか、さつきまでいなかった別の人物の声がする。

「まったく。キミたちはほんとに騒がしいね」

その声の主は、今回の事件の犯人であり被害者でもある少女…そして俺が救いたかった少女…暗黒星くろめのものだった。

「…ほんとに成功したんだな」

「敵であるキミたちに助けられるとは思っていなかったよ」

そう言つて自嘲気味に笑うくろめ。

「…聞かせてくれ。…今の気持ちはどうだ」

「…そうだね…少なくともネガティブエネルギーになりそうな大きな負の感情はないよ。憎んでたこの世界を壊そうなんて気もない」

どこか憑き物が落ちたような顔のくろめ。

「…そうか」

今のくろめを見て安心したのか、だんだん体に力が入らなくなる。とうとう支えきれなくなつて膝から崩れ落ちる。

「だ、大丈夫か!？」

いきなり俺が倒れたことに驚いたくろめが駆け寄ってくる。それにネプテューヌ達も続く。

…他人の心配ができるようになったんだな。これで俺たちは仲間だ。

声にならない声でそう呟くと、俺は意識を手放した。

くろめ救出・その後

今俺はルウイーの教会の自室のベッドに腰掛け、ゆっくりしているのだが…

「ふふ…」

くろめからじーつ、と見つめられて、結果的にゆっくりできていなかった。

くろめが何故ルウイーにいるのか、それはというと…

数カ月前にうずめを復活させた時に、一緒にくろめも復活させた。くろめを復活させるにはかなりの難点があったが、無事成功。でも、力を使いすぎた俺はその場で倒れ、自分が救出される過程を聞いたくろめが…

『…そうか。彼には命を助けられたんだね。…オレが彼の看病をするよ。助けられた恩は返したいからね』

と言っただけ。

それで、看病を終えてもルウイーにとどまっているというわけだ。

「なあ、くろめ…どうして俺の部屋にいる？」

「？…好きな人と一緒に居るのに理由は要らないよ」

「……またそういうこと言って」

とどまるだけならよかった。でも、今回みたいにストレートに好意を伝えてくるから困ったものだ。

あのとき倒れてから目が覚めると、いきなりくろめから告白された。いきなりで理解が追いつかず、返事はうやむやになったんだよな。

恥ずかしいのを承知で理由を聞くと、くろめ曰く、

『実は前々からキミには興味があつたんだ。そこにあんなことをされればオレがキミに惚れてしまうのは当然だろう?』

『ほんと、あの時のキミは白馬に乗った王子様に見えたよ。まあ、オレからしてみれば本当に王子様なんだけどね』

若干乙女チックな妄想も混ぜながらそう言ってくれた。

「……なあ、少し込み入った話をしてもいいかい?」

くろめの雰囲気が変わる。

「急にどうしたんだよ」

「まあ、いいじゃないか。たまには真剣な話をしてよ」

「……なんだか居づらい。」

くろめの顔が……こう……勝負前みたいな顔? になつている。

部屋が静寂に包まれる。話すのが躊躇われていると、くろめの方から話し掛

けてきた。

「…ありがとう」

「え・・・」

くろめは穏やかに微笑みながら言葉を紡ぐ。

「怖かったんだ。この世界に『オレ』じゃなくて『俺』の一部として生きていくことが」

「…くろめ」

「確かにオレは『天王星うずめ』の負の感情から生まれた存在。元を正せば『天王星うずめ』の一部なのが本来のオレだつてことは知っているよ。でもオレはもう『暗黒星くろめ』なんだよ。…一人の生きている人なんだ」

くろめの感情がひしひしと伝わってくる。

怖い。それはそうだろう。今の自分という存在が無くなる、否定される…いったいどれ程のことなのだろうか。俺には想像することしかできない。

でも、そうくろめは続けた。

「キミは…そんなオレに『オレ』として生きる道をくれた。何より嬉しかった。だから、ありがとうなんだよ」

そう言つてくろめはもう一度俺に微笑んだ。

…そうか。そんなことを思っていたのか。

「だからこそ、オレはキミに惚れたんだよ」

……はい？

「……はい？」

突然くろめは立ち上がると、俺に近づいてきてベッドに押し倒してきた。

ぽふっ…そんな軽い音と共に、ベッドに押し倒されている押し倒されている俺と、押し倒しているくろめという図が出来上がった。

「へ？いや…え？」

突然の脈絡のない…脈絡があったのかもしいないが、くろめの不意討ちの告白に、さらに押し倒されるということも相まって完全に混乱している。

そんな俺をよそに、意地悪そうな顔をするくろめ。

…ちよつとドキツとした。

「さあ、捕獲完了だ」

この状態から逃げようにも、くろめが四つん這いで俺に被さっているから無理だ。

「く、くろめ？どうしてこんなことを？」

「どうして、って…キミ自身わかっていると思うけど？」

…何かあったか？

と、惚けることはできないよなあ。思い当たることといえば一つ。

「……………うやむやになった…その…こ、告白のことか？」

「うん、正解。そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃないか。オレがキミに告白したことは事実なんだから」

そうは言われても、告白されたことをはなにかける程俺はバカ野郎じゃない。

「オレが告白したことは覚えてるね？ ……そろそろ返事を聞かせて貰おうと思ってるね」

「……………」

いきなりすぎだ。

そうは思っても、そんな言葉は言えない。

十分時間があつたことは分かつてる。その間に答えを出さなかつた俺が悪い。

…でも、本音は答えなんて出したくなかつた。

俺が答えを出すことで何かが大きく崩れてしまうと思つたから。

「……………そうか…仕方ないかな…少し借りるよ」

—————
チュッ

何を？ そう言う前に俺の唇はくろめによつて塞がれた。

「んむ!？」

「う……チユ……ふう」

何時間にも感じられる一瞬が終わった。

「な……な……い、今……キス……」

「すまなかつたね。でもキミが悪いんだよ。つまらないことで悩んでいるだろ

う?」

「ツ!」

「わかるさ。前はネガティブエネルギーなんてものを使ってたんだ。マイナスの感情には鋭いさ。それに……他の誰でもないキミのことなんだから」

自信たっぷりに微笑むくろめ。

「……」

「……やれやれ、まだ黙りか。……いいかい?一つだけオレから言えることがある。キミの考えてるようなどうでもいい小さなものなんて一言で十分さ」

「……オレはキミのことが大好きなんだ、だからオレはキミから絶対に離れな

いよ」

押し倒した状態で、くろめが体重を預けてくる。

女の子独特の甘い匂い、暖かくて華奢な体、どれもが俺を安心させてくれる。

くろめだけはどんなことがあっても一緒に居てくれる。

なぜだか確信することができた。

それと同時に、自分がほんとにどうでもいいことで悩んでたいたと思つた。

付き合えば周りとの関係も多少は変わるのがあたりまえだし、くろめの気持ちに応えたくらいでブランたちが俺から離れていくなんてありえない。

なにより…そんなことが起きててもくろめは一緒に居てくれる。それで十分だ。

「…ごめんな。女の子にここまでさせてしまうヘタレ男で」

ギョツと抱き締める。

「…あ……ほんとだよ。でも、オレはまだキミの口から答えを聞いていないな」

「……好きだよ。最初に告白されたときは驚いて返事することができなかったし、今さつきもつまらないことで悩んでいたけど……それでもくろめが好きだ」

俺が告白し終わると、自然とくろめと見つめ合う形になり、そのまま…

—— チュッ

二度目のキス。

「…これでオレとキミは相思相愛、恋人というわけだ」

「そうだな」

「ならこれからは人目を憚らずイチャイチャできるわけだ」

「そうだ——つて、ちよつと待て。……マジですか？」

「勿論、嘘偽りはないよ。試しにもう約一名には見せつけているしね」

「え!? 誰にだよ」

「さあ? 扉を開ければ分かるんじゃないかな?」

意地悪そうな顔で扉を指差す。

そんな仕草だけでも可愛いと思つてしまふのは惚れた弱味なのだろう。とりあえず、確認のために扉へと向かう。

「ロムとかラムだったら教育上よろしくないなあ」

呟きながら扉を開けると……

「……きゆうく」

顔を真っ赤にして目を回して倒れているブランの姿があつた。

「ええええ!!」

「あはは、おもしろいことになっているね」

イタズラが成功した子供みたいに笑うくるめ。

「……もしかして気付いてたのか?」

「ああ、そうだよ。といつても二度目のキスのときにだけどね」

なんてことだ……恥ずかしい。

「明日からいじられたらどうするんだよ」

「何を馬鹿なことを聞いているんだい？勿論、見せつけるだけの話さ」

「……くろめ。お前って以外とはっちゃけてるのな」

新しいくろめを見た。それはとても嬉しいことなのだが…新しすぎて以前のイメージが崩れていつている。

「…以前みたいにクールで落ち着いていた方がよかったかい？」

不安そうに聞いてくる。俺は今立っている状態だから、自然とくろめの上目遣いを受けることになる。

…少し破壊力がありすぎじゃないか？

「そ、そんなことない！今のくろめも好きだ！」

赤くなる顔を隠してそう叫ぶのが精一杯。

「そ、そうかい？ありがとう。嬉しいよ」

なんともいえない甘い空気になる。

すると、倒れていた筈の人物から声がする。

「あ、あなたたち…いつまでイチャイチャしているのかしら」
ブランが復活した。

「あ、ああブラン。大丈夫か？」

「原因は誰かしらねえ？」

あ、ヤバイ。キレル一步手前くらいだ。

「いや、え…と、その…」

「……いいわ。今は一刻も早くこのピンク色な空間から逃げたいし」

「…ごめん」

「でも一つだけ聞かせてちょうだい。貴方とくろめは付き合うのね？」

「ああ。俺はくろめが好きだから」

「そうだよ。オレだって彼が好きなんだ」

「……誰も好きの再確認をしろだなんて言っていないわよ。…まあいいわ。お幸

せに」

そう言い残すと、ブランは自室へと戻っていった。

…あれ？

「…もう少し何かあるのかと思ってた」

「…オレも……最悪戦わないといけないと思っていたよ」

「いや、なんで戦うんだよ」

最初の頃はともかく、今はそこそこの仲だろ。

「それは乙女の秘密さ」

一生わからないうような秘密だなあ。

「ともかく、これでキミとオレが恋人なのは周知の事実というわけだ」

「いや、ブランだけだよな、知ってるのって」

「小さいことは気にしないことだよ。それよりも……」

何だよ。そう言うよりも先にくろめに腕を引かれ、再びベッドの上に押し倒されてきた。

さつきも押し倒されたよな？

「……二度目か。というか、腕を引いたのはくろめなのに、何でまた押し倒された状態なんだよ」

「言っただろう？ 小さいことは気にするなって。それに、キミは中々奥手で手を出してくれないじゃないか。待ってたらキリがないからね、オレの方からいくようにしたんだ」

「……ヘタレで悪かったな」

こんなこと初めてだしと付け加える。

「ふふふ……初心なのもいいけど、オレはもつときてほしいかな。とりあえず、今まで我慢してきた分、イチヤイチャさせてもらおうよ」

俺に唇を重ねるくろめ。

「…う、ふう。…大好きだよ」
「…ああ、俺もだ。くろめ」

天王星うずめ

旅の共

早朝、いつもの鍛練をこなす。

走り込みから始まり、素振り、精神統一の流れだ。

「…お疲れさま」

「ああ、ブラン。おはよう」

ブランとはたまに会うことがある。そのときは徹夜か、早起きのどちらかだ。今日は機嫌がいいから、早起きの方だろう。機嫌が悪いときはいきなり模擬戦闘に持っている。れる。

「なんだか調子良さそうね」

「そうか?…まあ、そうなのかもな」

それも仕方ないことだ。なんたって今日はうずめが帰ってくるのだから。

「…ふふふ。野暮な質問だったわね。用件だけ言うわ。大人のネプテューヌがプラネテューヌに着いたらしいわ」

「お、そうか!」

「確かに伝えたわ。それじゃあ」

そう言つてブランは教会の中へと入つていった。

「久しぶりに会えるのか……うずめ」

数ヶ月前の零次元の事件解決の後、俺とうずめは恋人の関係になつた。告白は俺から……のはず。というのも、告白が二人同時だったのだ。そこは男の意地を張つたのだが、うずめの方も譲らず、そのままうやむやになつた。

けど、その後すぐとうずめは今のこの世界を知るために大人ネプテューヌと旅に出た。それはうずめが望んだことだし、俺もそれに賛成した。

それでも寂しいものは寂しい。

中々会えなかつたが、今日ようやく会えることになる。とにかく嬉しかった。それはもう、事前に来た連絡を聞いて、いつもの3倍のクエストをこなした程に。

「と、いけない。汗まみれのままじゃだめだよな」

そう思いブランの後を追う。

……と、その前に。

振り返り、今まで自分が居たところへと向き直る。

「……長い間お世話になりました」

深く頭を下げる。

そして今度こそ、風呂へと入るために教会へと入った。

風呂も済ませ、うずめが来るまで適当に時間を潰す。

時計の針は12時を指そうとしていた。

…遅いなあ。

そう思っていると、なにやら遠くから誰かの走る音が聞こえてきた。

その音は徐々に近づいてくる。

…どうやら来たみたいだな。

部屋の扉が勢いよく開けられる。

「帰ってきたぜー！」

そこには変わらない姿のうずめがいた。

「…おかえり、うずめ」

「会いたかったぜー！」

そう言つて勢いよく胸に飛び込んでくる。

勢いが強すぎて、後ろにあったベッドに二人とも寝ころぶ形になった。

「ちよ、うずめ。さすがに危ないって」

「大丈夫だって。お前が守ってくれるだろう？」

「…まあ、守るけど。いや、今の状況で守るも何もないだろう」

「まあな。でも気にするな！」

「…はあ」

うずめは全く変わってなかった。女神だからというのもあるが、もつと内面的なこと
で。

とりあえず、寝たままなのもアレなので、ベッドの縁に座り直す。

「さて…改めて、おかえり、うずめ」

「ああ、ただいま」

「それで、旅はどうだったんだ？」

「あー、すぐくためになった。あれだけのことが知れたんだから、旅に出た甲斐

もあつたよ」

「そうか。ならよかつたよ」

「でもな……やっぱ寂しかった」

そう言つて、上目遣いをするうずめ。

変わつてないというのは訂正。元は男勝りなところがあつて、内心は乙女なうずめだつたが、どうやら乙女な部分が浮き出てきたみたいだ。

…正直、破壊力がヤバイ。ギャップというやつなのか？

「そっか。俺も寂しかったよ。でもその分、今にすごく満足してる」

「まあ、それはそうだけど……」

何か言いたそうに口ごもるうずめ。

「どうした？何かあるのか？」

うずめは言うべきか迷っていたみたいだが、話してくれた。

「……実はさ、まだ旅は終わりじゃないんだ」

「うん、知ってる」

「こつちに戻ってきたのは休息の………はい？」

「いや、だから知ってるって」

………

しばらくの沈黙。

「俺の悩んだ時間を返せー！！！！」

「なん……ぐはっ」

いきなり叫んだうずめの渾身のボディープローをくらう。

「ちよ、う、うずめ。ブローはキツイ。ブローは」

「うるさい！俺がいつ言おうかどれだけ悩んだと思ってるんだ！」

うずくまる俺になおも追撃しようと身構えてくる。

「ま、待て。大人のネプテューヌが事前に教えてくれたんだよ。知ってた方が本人から聞くよりましだろう、つて」

「そ、そうなのか？で、でも…」

納得いかないうなうずめ。

「わかつてるから大丈夫だよ。うずめは俺が傷つかないように一生懸命考えてくれたんだろ？」

「…だって…恋人になつてから一度もそれらしいことしてないし…せつかく帰ってきたのにまた行かないといけないから…」

「…ありがとう。そこまで考えてくれて嬉しいよ」

うずめに近寄り、頭に手をのせる。そのまま撫でてやると、くすぐったそうに身をよじりながら幸せそうな顔をする。

「…あのな」

「ん、どうした？」

「そ、その…か、帰ってきたら…その…しよう決めてたことがあるんだ…よ」
もじもじしながら顔を伏せるうずめ。なんだか耳とか赤くなっている。

「…スを……るつて」

「ごめん、聞こえない」

よく聞こえず、もう一度聞き直すと、うずめはガバツと真っ赤になっ
て、

「キ、キスをするって決めてたんだよ！」

何故かご丁寧に愛用のメガホンを取りだし俺の耳にあてて叫んだ。

「ーッッッ!!」

当然のようにキーンと耳鳴りがし、視界が揺れる。

「だ、大丈夫か!？」

「あ、ああ。でも照れ隠しでメガホンはやめてくれ」

「う…だって恥ずかしいだろ」

再び顔を赤らめ俯くうずめ。その仕草の一つ一つが可愛くて愛しく思えた。

「…うずめ」

「なん——」

——チユッ

「?!?!」

そつとうずめの唇を奪う。

突然のことに体を硬直させ驚いていたうずめだったが、次第に落ち着いていき惚けた表情になる。

「キス……したな」

「う……あう……ず、ずるいぞ」

うずめの顔はもうこれ以上ないほど真っ赤になっている。

「ずるくなんてないさ。俺だつてドキドキがやばい」

「……ああ、王子さまあゝ」

「はい!？」

いきなりの発言にすつとんきような声を出してしまった。

よく見ると、これまで何回と見てきたうずめの『妄想』のときの顔になっていた。

「おい、いったいどういう——っ」

いきなりの妄想モードに動けずにいるとうずめに押し倒される。そのままうずめは覆い被さつてきて、俺の胸に頬擦りをしてきた。

「お、おい!?! 恥ずかしいんだけど!？」

「えへへ、私だけの王子さま! いつも助けてくれて、頼りになるカッコいい王子さま」

きつと今の俺は顔が真っ赤だろう。うずめに押し倒された状態でしかも誉め殺しにされているんだ。仕方ない。

そんな俺をよそに、うずめは頬擦り続けながら幸せそうに声を漏らしている。

可愛い。とにかく可愛いが、このままでは俺がもたない。主に理性的な面で。

「うずめ…許せ」

「いてっ！」

うずめの頭にチョップする。

「……………あ……!!!!」

さつきまでの乙女な自分を思い返したらしく、本日何度目かの赤面をしている。

「は、走ってくる！」

そう言い残すと、音速を越える勢いで部屋から出ていった。

「……………なんとというか、折角帰ってきたのに落ち着かないなあ」

楽しい時ほど早く感じるもので、うずめが再び旅に出る日が近づいてきた。

「…また会えなくなるのかあ」

「そう落ち込むなよ。また会えるって」

「なんでお前はそんなに元気なんだ？」

「なんでって…まあ……落ち込んでても変わらないだろ」

「……………それもそうだよな！よし、残りの日で名一杯イチャつくぞ！」

「よし、元気になったな。そんなうずめにはきつといいことがあるぞ」

なんでこんなに俺が元気なのか。それは当日わかることだ。

そして当日。

大人のネプテューヌが迎えに来る手はずだ。

今、教会の前には俺やブラン、ロムとラムそしてうずめが向かい合っている。

ロムとラムは泣き出しそう。うずめは面倒見がよかったから頼れるお姉さんみた
いになってたな。

……終始そのことで落ち込むブランを慰めていた。時には物理的な愚痴を聞いてあげたりもしたことはいい思い出だ。

「泣くなよな。俺まで泣いちゃうだろ」

「やだやだ！もつと居て！」

「グスツ……もつと遊びたいよ」

「ほら、ロムもラムもうずめに迷惑よ」

ブランがうずめの腕にくっついてグズっていたロムとラムを引き剥がす。

姉らしいことができて顔が得意気になっているのは気のせいだ。

「うーん、こういう空気は苦手だぜ」

「うずめは賑やかな方が好きだもんな」

「だってその方がいいだろ？」

そう言つて笑ううずめ。

…ブランの方を見ると視線が交錯する。

その目は「早く言うこと言いなさい」と訴えているように見えた。

「……なあ、うずめ」

「ん、なんだ？」

「今から言うことは本当のことで、もうブランたちには言つてあるし許可も貰つてる」

「ど、どうしたんだよ急に？」

いきなりの話の展開に着いてこれていないうずめ。

「単刀直入に言う。これからは俺も旅に加わる」

「なんだそうか。お前も俺たちの旅に加——わる!？」

「ああ。これは何カ月も前から決めてたことだ」

理由は2つある。

1つ目は、やっぱり恋人なのに側に居れないのはおかしいとおもつたから。あの寂しさはキツイ。

そして2つ目は、もう俺が居なくても大丈夫と思つたから。先代のルウィーの女神か

ら刀を渡され、国を守ってほしいと言われてから、ずっとそのことを気にかけていた。だけでもういいだろう。ブランはすっかり成長し、ロムとラムもみちがえた。いつまでも俺みたいな擬似的な女神がいるというのは、逆に妨げになると思う。

ブランにもその話をした。ブランは必死に思い止まるように説得してきた。それでも俺の意思は変わらない。けじめとして、刀もルウィーに返そうとした。だが、ブランはそれだけは頑なに認めなかった。そこに少しだけ嬉しきを感じてしまったのは秘密だ。『ブランに認められている。ルウィーの、自分の大事な人として』そう思ったことが知れたら、恥ずかしくて死んでしまう。

「……ほんと、なのか？」

「ああ」

いまだ信じられないような口調で聞いてきたうずめに対し、しつかり答える。

俺の答えを聞くと、今度はブランの方へ向き直る。

「ブラン……」

「何も言わなくていいわ。彼が決めたことだもの」

「で、でも……」

「……はあ。そうね、正直に言うとなんには居てほしいわ。国がどうかかっていう理由だけじゃない。ずっと一緒に居たから……でもね、たしかにもう充分なのよ。そろそ

ろ彼ばかりに頼ってはいられない」

「うずめ。貴女は恋人なのよ。もつと堂々としなさい。彼と一緒に居てくれることを素直に喜んでいいの。そうしないと、彼も私も立つ瀬が無いわ」

ブランの言葉がグツときたようで、うずめの目は先程以上に涙目だ。いや、もう頬を一筋の涙が流れている。

「…わかつたぜ、ブラン。ありがとな」

「…別に構わないわ」

「……………わっ!?!なんだ!?!」

しーんとした空気の中、いきなりうずめの持つている通信機が鳴る。

『おーい、聞こえてる?』

「ああ、聞こえてるぞ」

『もうすぐルウィーだから準備しといてね』

「わかつたぜ」

どうやら大人のネプテューヌからだっただけらしい。

「もうすぐだつてさ」

「そうか」

ブランたちの方を向く。

る

「ブラン。ロム。ラム。お前たちなら大丈夫だ。俺が居なくてもやっていけ

「わかつているわ」

「お兄ちゃん…」

「…：…うう」

「ほらほら、泣くなよ。帰ってきたりはするから、な？」

「絶対よ？」

「お兄ちゃん…約束の指切り」

「そうだな」

三人で指切りをする。

「…：…それじゃあ、もう行くよ。元気で」

「ええ。気を付けて」

「お兄ちゃん、いってらっしゃい！」

「お兄ちゃん…頑張ってきて！」

「ああ！」

これ以上は泣いてしまいそうで、うずめの方へ向き直る。

「…行こうか」

「…よかったのか？なんて聞かない。でもその代わりに、ありがとう。これは言っておくぜ」

「大丈夫だ。俺が選んだんだから。これからよろしくな、うずめ」

日常

イタズラな日

「…お兄ちゃん…あそぼ?」

「お兄ちゃん、遊んでよ!」

…どうしてこうなった?

俺の目の前にはラムとロムがいる。…が、実際はロムとラムだ。

…わからなくなってきたから一度整理するか。

いつものように女神宛に届くクエストを処理しようとブランと話していたのだが、その日は数が多かった。

そんなときに限って面倒事はあるもので、ロムとラムの駄々も一際しつこかった。

『ひまー!遊ばたい!』

『お兄ちゃん…遊ぼ?お姉ちゃんも、ね?』

『遊んでくれないならクエストに行くー!』

『ふえ!?…ラムちゃん』

さすがに仕事どころではなかったので、ブランは渋々クエストを許可した。俺が同伴

ということが条件だが。

少し準備のために部屋に戻った。それからロムとラムを待たせてる場所に行ったのだけど：

「…いない。……まさか!？」

慌てて教会の外に出る。それから教会近くの店に駆け込む。

「なあ、少しいいか？」

「おう、教会の兄ちゃんじゃないかい。そんなに慌ててどうしたんだ？」

「ロムとラムを見なかつたか？」

「ロム様とラム様ならついさつき飛んでいかれてたが……何かあつたのか？」

「…勝手にクエストに行つたんだよ」

「あ、ああー、そうか」

わりと利用しているこの店のおやじさんには、いつも愚痴を聞いてもらっている。ロムとラムのことも話しているので、大体を察してくれた。

「それじゃ、おやじさん。ちよつと行つてくる」

「おう！ 気を付けてな」

刀を手にし、シエアエネルギーを活性化させる。そして疑似女神化を終わらせた俺は全速力でロムとラムの後を追った。

「アイスコフィン!!」

ツツツツ!!

ロムとラムの技が決まり、モンスターが倒れる。

「やったね、ロムちゃん!」

「うん! クエスト完了」

「やっぱり私達さいきよーね」

「…でもよかったのかな? お兄ちゃん置いてきたよ?」

「いいの、いいの。もたもたしてお兄ちゃんが悪いんだから」

無事にクエストを終わらせた油断していた。倒れていたはずのモンスターがロムとラムに近寄る。

会話を夢中だったロムとラムに影が射す。

「ツツツツ!!」

「キヤアアツ!!」

「確かクエストはこの辺りだったはず……」

おやじさんに聞いた後すぐにロムたちの跡を追ったが、全く姿が見えない。

「まさか入れ違いに?…いや、いくらなんでも早すぎるか」

とにかく辺りを注意深く見回す。すると森続きから一転、開けた場所があった。そこにロムとラムの姿があった。

…が、二人は気を失っているようで地面に倒れていた。そして、側には既にぼろぼろな状態のモンスターがいた。そのモンスターは今まさにロムとラムへとドメをさそうとしている。

「くそっ!!」

それを確認すると同時に一気に加速する。ほぼ一瞬でモンスターとロムとラムの間に到着する。

突然現れた俺に驚く素振りすら見せず、モンスターは振り上げた腕を叩きつけてくる。

モンスターが手負いだったのが幸し、攻撃を防ぐことができた。相手が硬直したのを見逃さず懐へと潜り…

「テラレイド!」

必殺の十字の斬撃を叩き込む。

技は決まり、モンスターは光の結晶となって霧散する。

「…………ふう」

周囲に他のモンスターが居ないか気配を探り、安全を確認したところで肩の力を抜く。

すぐにロムとラムへと駆け寄り、容態を確認する。

「……気絶しているだけか……よかった」

それにしてもさっきのモンスター……とてもさっきの攻撃だけで倒せるものじゃなかった。恐らくロムとラムとの戦いで傷付いたのか……

「強くなったな……二人とも」

思わず言ってしまったけど、なんか年老いた感じが……気のせいだよな？

……まあ、こんなところに長く居るのは危険だし、早く帰りますか。

倒れているロムとラムを担いで、ブランの元へ帰る。

ひとまず一件落着。

…

……そう思ってた時期があったよ。

問題はルウィーに着いてからだ。二人が目覚めますのを教会の自室で待っている……

「どうなってやがるんだー!!」

「なんだ!?!」

突然聞こえたブランの怒声。

慌ててブランの元に行く。

ブランがいたのは自分の部屋ではなく、ロムとラムの部屋だった。

「お、おい……どうした……ん……だ」

部屋の前に立ち尽くすブランに声を掛けようと近づくと、子供部屋の中が見えた。

思わず固まった。

部屋の中はもう悲惨な状態だった。本棚の絵本は散乱して、お絵描きは白い紙を飛び出し壁までロムとラムのキャンパスとなっている。

だが、実を言うところのくらは驚くほどじゃない。こんなことを言いたくはないが、これくらいが日常だ。

だから、こんなことでブランが声をあげることもない……訳でもないが、まあ、それはいいとして……ブランと俺が立ち尽くした理由、それは部屋にいるロムとラムにあった。

元気一杯に絶賛お絵描き中のロム。

静かに絵本を読んでいるラム。

……おかし。

そう。おかしいんだ。ロムはおとなしい子で、ラムは元気溢れる子だったはずなん

だ。けど今は全くの反対。

…まるで入れ替わってるみたいだ。

「あ！お姉ちゃんとお兄ちゃん！」

「…あ、ほんとだ」

呆然と立ち尽くす俺とブランに気づくロムとラム。いや、ラムとロムとしよう。

「ふ、二人ともどうしたんだ？ラムとロム…じゃない、ロムとラム、だよな？」

「ふふふ、違うよ、お兄ちゃん」

「…違うよ」

「なんとね…起きたら私たち入れ替わってたの！」

「入れ替わってた！」

「……」

どうやらラムとロムということとで合っていたらしい。

「…おい、ちよつと来い」

隣のブランさんから怖い声が聞こえた。

「…はい」

「なにになに？どこかいくの？」

とロムの姿のラム。

「気になる」

とラムの姿のロム。

「いいの。貴女たちは遊んでなさい。：ほら、行くわよ」

俺とブランは子供部屋を後にして、ブランの書斎まできた。

「…なにか言いたいことは？」

「完全に自分が悪いです。目を離れた隙に先に行かれ、危ない目に合わせてしまった自分の責任です」

認めるしかない。十全で悪いのは俺だ。

「…殴るのだけは勘弁しといてやる」

命拾いした。

「でも、どうしてあんなことに…」

「…モンスターに原因がある可能性はないの？」

「いや、新しいモンスターとかじやなかったからその可能性はないと思う」

「でも考えられる可能性はそれくらいしかないわ」

「そこだよなあ。こんな事例は今までなかったし」

現状、打つ手がない。

「いいわ、私の方で過去に似たようなことがなかった調べるわ。ラムとロムの

面倒はあなたが見ていて」

「そうだな、それくらいしかないか」

とりあえず今後の方針は決まった。ブランが情報収集で俺が子守り。

…なんか情報収集に比べると子守りってアレに思う。

でも実際は違った。

正直、入れ替わったラムとロムを侮っていた。それはもう、情報収集という大変な仕事
事が簡単に思えるくらいに。

あろうことか、入れ替わっているということを使ってイタズラしてきたのだ。

あるときは落書きを見つけラムを叱りに行ったとき。

「コラ！壁に落書きをしちやダメだって何回も言っただろ！」

「ふえ!?……ウルウル……私じゃないもん」

「言い訳してもダメだ……て。あれ？なんかいつもと……あ！ご、ごめん、ロム！」

「イエーイ！大成功！」

「あ！ロム……じゃなかった、ラム！待ちなさい！」

あるときは遊びに付き合っただけのとき。

「……や——！」

ラムが雪合戦で雪玉投げってくる。

「まだまだ甘いよ」

「…ねえねえ、お兄ちゃん」

「ん？どうした、ロム？なにか——ウグツ」

顔面に雪玉がヒット。

「やーい引つ掛かったー！」

「…大成功」

「そうだった…入れ替わってたんだった」

他にもここ数日間で数えきれないほどイタズラをしてきた。

その数日間、ずっとこうなつた原因を探していたのだが見つからないままだった。

「はあ…。いつまで続くんだ？もしかしてずっとこのままということも……」

一人思考を巡らす。

もしこのままだったら。それはいろいろ大変なことだろう。

まず、ネプテューヌたち他の女神への連絡。そして自国民への告知。その他にもたく

さんの…。

……

だが、それは杞憂に終わった。

何故かというと。

「見つかつたわ！」

「ほんとにか!？」

ようやくブランが情報を掴んだのだ。

「それで、どうなんだ？」

「それが、資料によると……」

ブランが説明を始めようとする……

「「ああー……」」

「今の声はラムとロムか!？」

叫ぶということは何かあったと思ひ、部屋に急ぐ。

「ラム、ロムどうした!？」

「……あ、お兄ちゃん」

「ラム、大丈夫か？」

「お兄ちゃん……私、ロムだよ？」

「へ?……いやいや、いつものイタズラか?残念だけど引つ掛からないよ」

「ほんとに私、ロムだよ」

「ほらほら、冗談はそのくらいで、ね?」

「……う、ふえ……ヒック……ほんとにロムなのに」

優しく言ったのに突然泣き出してしまった。

「あれ？もしかしてほんとにロム？入れ替わりが治ったのか？」

「もう！さつきからそう言ってるじゃない！ロムちゃんを泣かすお兄ちゃんは嫌い！」

ずつと黙っていたロム……じゃない、ラムが泣いているロムを庇うように立つ。

「どうやらほんとに入れ替わりは治ったらしい。だとしたら酷いこととしてしまったなあ。」

「ごめん、ロム。いつもみたいないたズラだと思って気づけなかったよ。それにロムの言葉を信じてやれなかった。ほんとにごめん」

誠心誠意謝る。

「うう……ヒック、ぐすつ……」

「ただど中々泣き止んでくれない。それぐらいロムはシヨックを受けたということか。」

「これからはロムの言葉をちゃんと信じるから。ね？」

「ふえ、ヒック……ほんとに？」

「うん。絶対だよ」

ロムの目線に合わせて頷く。

「……だったら、いい。いいよ、お兄ちゃん。もう気にしてないから」

「…ありがとう」

これで解決…:…と思つたら、

「だめよ!」

ずっとロムと俺の間に立っていたラムが叫ぶ。

「なにがダメなの、ラムちゃん?」

「そんなに簡単に許しちゃだめよ!お兄ちゃんになにか要求しないと!」

いつもなら、我が儘言わない、などと言えるのだが、今回ばかりは願いを聞くしかない。無茶なもの以外は答えてあげようと思う。

「ええ〜!」

「ほら、なにかないの、ロムちゃん?」

「えーと…:…それじゃあ、お兄ちゃん」

「なにかな?」

「これからいーっぱい遊んでほしい」

「うん、いいよ」

「…あとね、皆でお出かけしたいの」

願い事すべてがロムらしい可愛いものだった。

「そっか、ブランと話してみるよ」

「…えーとね、あともう一つあるの。今度のお休みの日、ラムちゃんと私とお兄ちゃんの三人でもお出かけしたいなあ」

「いいね！ロムちゃん！」

「…えへへ。いつもお姉ちゃんばかりお兄ちゃんと話してて羨ましかったから」

「わかったよ。今度行こうね」

「うん！」

これで、許してもらえたようだ。そのあとは、部屋でロムとラムの遊びに付き合った。

「ブラン！」

あれから数日後。そういうえばブランが説明を言いかけてたことを思いだし、聞きにきた。

「なにかしら？」

「いや、そういうえば入れ替わりのことについて聞きそびれてたなと思ってさ」

「ああ、そのことね」

「ああ、で、どうだったんだ？」

「ええ、わかったといつても、あなたが倒したモンスターの情報は一切無かった

の。見つけたのは、あの入れ替わりが一時的なものということだけよ。それを伝えようとしたらもうその時がきたのよ」

「なるほど」

「いまでもなんで入れ替わりが起きたのか、詳しいことはなにも解ってないわ。新種のモンスターの特も含めてこれからルウィーで研究に入ろうと思ってるわ」

「そうか、なにかできることはあるか？」

「そうね…あなたは今まで通りでいいわ。ただ、モンスターを狩るときは新種がないか注意してほしいわ。どうしてもサンプルがあるのとないのとは研究の進捗に大きく違いが出るから。あとはロムとラムの相手をしてあげて」

「了解。それじゃ、さっそく相手してくるよ」

「ええ、お願い」

ブランと別れて、ロムとラムの部屋に向かう。

危険そうで平和そうで大変なルウィーの日常だった。

ネプテユーン（パープルハート）

大人の魅力

「あら、遅かったわね」

透き通る声。しかしどこか狂気を孕んだ声だ。

女神化は人が変わる。肉体的にも、精神的にも。大人びたり、氣勢が荒くなったり様々だ。

冬空の下、そんな格好で寒くはないのだろうか心配になる。今の状況だとしても。

「……ネプテユーン」

それが今、男の目の前にいる女神の名前。雪がこんこんと降っているというのに、露出の高いプロセツサユニットに身を包み、寒そうな素振りを見せず、平然と展望台の手すりに寄りかかっている。

「それも私の名前だけど、今の私は女神化してるのよ？　パープル・ハートと呼びなさい？」

どこか高圧的な喋り方。ネプテユーンという女神が女神化した場合の特徴の一つだ。だがそれは、今の状況において、場の空気を緊迫させるスパイスとなっていた。

ネプテューヌの足元。そこには何かが転がっていた。いや、何かなどではない。ネプテューヌの足元に転がっているそれは。

「……ブラン達を解放してくれ。そうすればまた前みたいにはいかなくとも、それに近い関係に戻る」

「いやよ」

男に返ってきた答えは拒絶だった。ネプテューヌは今まで手すりに寄りかかり展望台から見える自国——プラネテューヌ——の光輝く街並みを見下ろしていたが、男の言葉に振り返り、足元に転がるブランを踏みつけた。

男は一瞬ピクリと反応するが、それ以外特に変化はなかった。本当なら、怒りのままブランに乗っかっていているネプテューヌの足を払いたかったが、下手に動く今のネプテューヌが何をしでかすかわからないため、動くのを踏みとどまったのだ。

「あなた、自分の置かれた状況が理解できていないのかしら？」

「……脅迫を受けている」

「違うわ。私はあなたに告白しているの。今はその返事待ち」

「ブラン達を人質にとつての告白？　はっ！　そんな気の触れた告白なんて聞いた

ことがないけどな」

男の言葉にネプテューヌは静かにブランを踏みつける足に力を込めた。「うう……」

とブランはうめき声をあげる。しかし、依然として気絶したままだった。

「や、やめろ!」

ネプテューヌは男が声を荒げたことに満足したのか足に込めた力を抜いた。

「ふふ……そんなに声を荒げちゃって。可愛い反応ね」

満面の笑みでそんなことを言う。狂気に塗れたその笑みは、夜の雪と相まって妖艶に見えた。

「ネプテューヌ……」

男はどうしてこうなったのか考えていた。全ては過ぎたことだというのに。

いつもと変わらない日常だったはずだ。

いつものように集まって、話して、遊んで、そんないつもと変わらなかったはずだった。

思い返しても何が原因なのかさっぱりだった。

黙ってしまった男の態度にイラついたからだろう。ネプテューヌは更に足元に転がるブランへと体重を加えた。

「あああああつ……」

「っ! やめろ!」

再び耳に届いたブランの苦痛の声に、男の意識は強制的に目の前のネプテューヌへと

戻された。そのことに満足したのかネプテューヌは少しだけ力を緩めたようだ。

ネプテューヌがその行動をとった理由は簡単で、男の意識が自分に向いていなかったからである。

たつたそれだけの理由だが、それだけの理由で仲間躊躇なく手を挙げるのが、今のネプテューヌなのだ。

男はそんな様子を見て、改めてネプテューヌの異常さを実感した。

「ふふ……そんなに情熱的な視線を向けられちゃ困っちゃうわ」

当然、男はそんな視線を向けてなどいない。向けているのはむしろ敵に向けるものに近い。

「……頼む、ネプテューヌ。ブランたちを解放してくれ」

「なら答えて？ 私のものになるって。そうすれば全部丸く収まるのよ」

結局最初のやり取りに戻ってしまった。

ネプテューヌが求めている告白の返事。否、きつとネプテューヌが男に求めているのは告白の返事なんかではない。ただ「所有物になります」という答えのみ。

そのことが意味するものを男は薄々感づいていた。だからこそ、一刻も早くブランたちを助けたいが、首を縦に振れないでいる。

思考が許される短い時間で、必死に打開策を考える。

だけど思いつくどれでもが、最善の結果とはならないものばかりだった。結果、男に残された選択肢は始めから一つしか残っていないかったのだ。

「……わかった。それでブランたちを守るのなら、ネプテューヌ……お前の人形になってやる」

「人形だなんてとんでもないわ。あなたは私の恋人……ゆくゆくは夫になる関係なの。人形みたいな扱いはしないわ。私の全てであなたを愛してあげるんだから」

ネプテューヌの言葉を聞き流し、男は今なお気絶したまま地面に横たわっているブランたちを見つめた。

おそらく今後ブランたちと会うことはないだろうという予感がしたゆえの行為だった。

実際その予感的中している。

男は今後プラネテューヌ領のどこかの建物でずっとネプテューヌ監視のもと監禁される。ブランたちどころか、ネプテューヌ以外にも顔を合わせなくなるだろう。

食事はネプテューヌが運び、ネプテューヌが許さない限り部屋からすら出られない。ネプテューヌのために生き、ネプテューヌと添い遂げる。

既に男の人生は決まっているも同然だ。

「さ、行くわよ。あなたを送り届けた後で仕方ないからそこに転がってるのも送ってあ

げるわ」

最早ネプテューヌの認識では、個人ではなく男の周りを飛び回るハエ同然にしか映っていなかった。

自分がいい後でも、どうかブランたちが幸せであることを祈りながら、後ろ髪を引かれる思いでネプテューヌに連れられ、男はブランたちの目の前から姿を消した。

その後、彼の姿を見たものはいないというのは、言うまでもない。